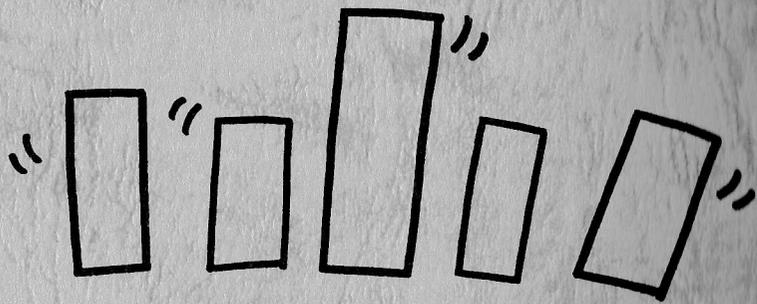


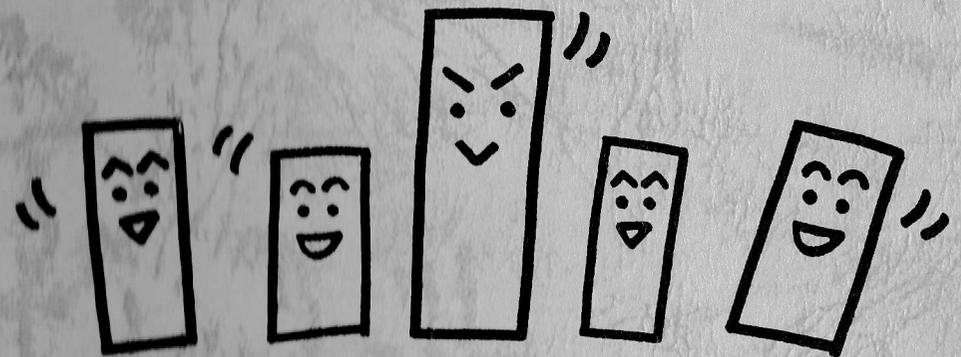
入間市生涯学習をすすめる市民の会 会報 ビーブル 第一号 一九九七

People 1997

入間市
生涯学習をすすめる
市民の会会報



いっしょにいこう



目次

私たちの生涯学習推進について	2
特別寄稿	
中島竹正 「生涯学習をすすめる市民の会」の発足と 今後を期待するもの	3
委員報告	
山本和人 生涯学習の推進体制に思う	4
西久保夏代 私にとっての生涯学習	10
松永輝義 子どもの育ちを求めて	11
並本寿紘 中学校の部活動に協力して	12
鈴木豊士 FMチャップ- 市民ボランティア・スタッフ への期待	14
石川経造 高齢者の生涯学習と憩いの家	16
中込紀子 朗読ボランティアはづきのこと	17
長谷川正子 NPO法成立に思う	18
ゆとりメート	20
増岡達也 出会いを楽しむ	22
庄 菊博 ドイツにおける成人教育の実態	24
下野武司 自分流好き勝手に充実した人生を	30
三浦はるみ 芸術は心を育てる 遊びは人を育てる	32
山尾聖子 空耳・生涯学習	34
塚田とも子 自分流生き方 さがしてみよう	38
委員名簿	39
1997年度事業報告	40
1997年度決算報告	44
1997年度事業参考資料	
生涯学習情報紙かがやく縮刷版	45
生涯学習フェスティバル資料	53
記念講演概要	58
公開ディスカッション概要	60
生涯学習徹底追求研修会概要	62
小山市視察研修報告書	64
1998年度事業計画	66
1998年度後援事業	67
事務局より	68

私たち「生涯学習をすすめる市民の会」は発足して三年目になります。

多忙なメンバーの集まりですが、月一度の定例会と随時開かれるスタッフ会議を中心に、生涯学習という言葉が含む範囲の大きさを認識しつつ活動しております。学歴社会の行き詰まりを打開しなければならない教育界の要請はもとより、高齢社会における生きがいづくりやボランティア、情報化や国際化への対応など、各分野からの必要性和期待が合致するのが生涯学習という概念ととらえ、その中で私たちのできることをさぐりながら、次のような話し合いをしています。

- 1、公民館の有効利用（コミュニティセンターとしての機能充実）
- 2、有償ボランティアも含めたボランティア活動のためのシステムづくり
- 3、地域住民が、小中学校の部活動指導に参加するシステムづくり
- 4、高齢者の技能、経験を活かせる環境づくりと機会の発掘
- 5、生涯学習情報の収集とネットワーク化（個人単位、企業単位）
- 6、生涯学習に関する相談ができる相談員の配置
- 7、生涯学習センターの構想

具体化への道のりは長いものですが、各方面の方のご意見を積極的に取り入れながら行政とスクラムを組んで活動していきたいと考えています。

生涯学習が活性化しているまちは、きっと住みごちのよいまちだから。

共通するのは、住みよいまち、入間への思いです。

環境経済部副参事（前生涯学習担当） 中島 竹正

「入間市生涯学習をすすめる市民の会」は、市民の生涯にわたる学習活動を支援するために設置されたボランティアによる推進組織です。

この推進組織は、平成7年に策定された第4次入間市総合振興計画の基本構想に示された生涯学習の推進にあたっては、市民による、市民のための生涯学習を基本として展開する。という考え方にに基づき、庁内の推進組織において生涯学習の推進体制が検討され、その後に、生涯学習について広く市民の意見を聴くために設置された「入間市生涯学習のまちづくり懇話会」（座長：松永輝義氏）から提出された『入間市における生涯学習の推進に関する考え方』の意見等に基づいて、公募による委員も含め25人の委員により平成7年5月に設置されました。当時の生涯学習を推進する組織としては、行政、関係団体（主に組織の代表者）及び知識経験者により推進組織が構成され、行政のトップである市長が代表者となり、先頭になって生涯学習を推進するという形が主流を占めていました。その結果として、ある一定のところまでは比較的短い時間で効果を挙げることはできるのですが、その後、停滞をしてしまうという状況が先進地と言われる市町村においても問題となっていました。

もちろん生涯学習の関係者は、生涯学習の主体が市民であることも、行政は、市民の主体的な学習活動を支援する立場にあることも理解しているわけですが、生涯学習に関する施策を策定し、実施する段階になると、基本となる考え方やこれまでの取組経緯が次第に薄れてしまい形式的な市民の参加になってしまったケースもあったように感じています。

また、今日の市政と市民との関係においては、市民が近隣同志のトラブルや苦情、要望を市に直接持ち込むことが多くなっています。この傾向は、生涯学習に関する学習相談等についても同様なことが言えると思われます。こうした市民の行動から、今後の生涯学習をすすめる市民の会は、これまでの役割とともに、市民と市民、市民と行政をつなぐコーディネーター的な存在として、生涯学習に関するさまざまな調整を行う機能が求められると思います。

平成8年に策定された入間市生涯学習推進計画（いるま生涯学習プラン21）がめざしている市民と行政が一体となった生涯学習によるまちづくりの推進に向け、行政と適当な距離を置ながら連携する市民側の推進組織として、ますます活躍されることを期待しています。

生涯学習の推進体制に思う

< 生涯学習に吹く風 >

生涯学習の帆に吹く風が次第に凪いできている。高齢社会を睨んだ緊縮財政のあおりを受けているためだけではない。「学歴社会の弊害の是正」と生涯学習社会の建設に向けて、日本の教育制度は気がつかないうちに大きな変化を遂げようとしているし、その意味では、生涯学習支援の体制整備と制度化が進んでいるからでもあろう。少なくとも国レベルでの生涯学習に向けての制度化に限定すれば、それは着実に進んできている。いずれ市町村段階の取り組みにもその影響は波及し、それぞれの自治体の特色を生かしながら、基本はかなり同様な制度・支援体制ができあがると予想される。

これまで吹いていた風は、わが国の人々が生涯学習の必要性の認知と活動への取り組みに注意を向ける上で必要なものであった。その点では、風向きは人々の視線をそらえ、大成功を納めている。今や生涯学習という言葉を知らない人はほとんどいないといえよう。また、言葉は知らなくても、実際に取り組んでいる人は多い。生涯学習の実践家はそれが生涯学習の活動であると気づかないかも知れないが、それはそれで気がつかなくてもよい。しかし、いつの間にか、自分が「生涯学習の活動」を進める上で、やり易くなっていたり条件がそろっていることに気がつくことになる。

昭和62年10月に「教育改革に関する当面の具体化方策について」が閣議決定されて10年が過ぎた。わが国の生涯学習社会へ向けての政策転換・方針転換は成功したといえるのではないか。もしかしたら、世界市民への脱皮に必要な「金融ビッグバン」を乗り越えることができ、「成功した」と断言できるのかも知れない。少なくとも、終身雇用制度の再検討、年功序列の見直し、男女共生社会形成に向けての取り組み、福祉制度の見直し等々は、基本的に生涯学習社会であってこそ実現可能なものといえる。そうした再検討や見直しの方向に大きく動くことができたのは、日本における生涯学習の制度化の取り組みに「国民的合意」が得られたからである。

生涯学習とは、ある人にとっては公民館活動への参加である。ある人にとっ

てはゲートボールの練習や試合に出ることである。また、ある人にとっては資格取得の勉強への取り組みであり、ある人にとっては大学への進学である。そして、ある人にとっては職場での昇進のための研修であったり、高等学校の開放講座への参加であったり、ボランティア活動への参加や、PTA活動への参加であるなど、人々の生き方の数だけあるとあってよい。それほど多岐にわたっている。

いずれにせよ、生涯学習とは、誰もが、どのような活動であれ、生涯にわたり学んでいくこと、学び続けるとが大切なものであるという点で一致している。そして、一人一人に必要な活動となっているのである。それが大事であるとするのであるから、人々の意識は大きく変わったとあってよい。今や生きがいや余暇利用や趣味の活動とは限らない学習活動が、当たり前のように行われるようになっている。カルチャーセンターへいたり、社会人が大学や大学院へ進学するだけではない。通勤・通学途中の電車の中で、ウォークマンのヘッドフォンから流れ出るものも音楽とは限らない。文学作品の朗読であったり、法令を暗記するために吹き込んだ自分の声であったり、商談に必要な英会話のフレーズなのである。また、ボランティア活動など社会参加の活動はそれ自体が「学習」とさえなっているのである。

< 今必要なこと >

冒頭で、風が凪いできていると書いたが、しかし一方で、人々はもう生涯学習に目を向け、取り組み始めているのである。そして、そのための学習機会を探したり、自分が学びたいと思っていることがどこで学べるか、活動できるかという情報を求めたり、学んだ成果や自分ができることを地域や社会で生かしたいと思っているのである。生涯学習が必要であるなどと改めていう必要などない。知らなくてもすでに活動しているのだから。必要なのは「さらに促進するための仕組みづくり」であるといえてよい。そして、地域の実情の中から、よりふさわしい制度を作り上げるということなのだと思う。

学習活動は活発に行われているのに、学んでも活躍する場のない人、学んだ成果を生かすことが出来ない人が多い。活躍したいと思っても、なかなかその機会がない。生涯学習の活動が増えてきているといっても、「学歴社会」

がよくないといっても、学歴だけが学習成果を証明する唯一の方法であっては学歴社会の弊害は無くならない。人々が行う多様な学習活動の成果を評価したり、その結果を認めて社会の中で生かすことができなければ、何のための生涯学習体制への転換であろうか。繰り返すが、学びたいと思っている人、学習情報や学習の場・機会を求めている人が多いだけでなく、学んだことを生かしたいと考えている人は多いのだ。

< 地域の特性を生かした「まちづくり」とのかかわり >

身近な地域社会の中で、ボランティア活動や人々との人間関係を深めたりする活動が生涯学習の活動であると考え人は、あまり多くないかも知れない。だがそれは紛れもなく生涯学習の活動の一つである。それは活動を始めればすぐわかることである。生涯学習の取り組みは幅広く考えることが大切である。そうした中でも生涯学習を推進する一つの視点は、まちづくりとのかかわりで生涯学習を支援していくことであろう。

他の自治体で行われている「まちづくり」とかかわる生涯学習の振興や支援の取り組みを、入間市に当てはめて例えれば次のようなことであろうか。これらは今後益々必要になるものであろう（ただし、これはあくまでも一つの例ではない）。

入間市は狭山茶の主要産地として全国に名高い。入間市のまちづくりもお茶を抜きにしては考えられないように思う。だが、これまでのお茶との関わりを見るとき、お茶に関わる産業の人たちしかまちづくりに参画できないかのような感があり、そうしたことへの批判の声もないわけではない。このままではせっかくの「お茶」という資源も生かされないままになる。入間市にある「観光協会」も生きてこない。

それにお茶といえば「抹茶」というのもおかしい。確かにセレモニーとして日本文化の様式美を代表するものではある。だが、日常的には抹茶よりも煎茶を飲む人の方が、人数もその機会も多いのは間違いない。そこで思うことは、「さすが、入間に育った子どもだ、お茶の入れ方がうまい！（煎茶の話である！）」と誉められれば、子どもも入間に愛着が湧くのではないだろうかということである。

そこから、一例を考えると次のようなことを空想できる。お茶の入れ方の指導は「入間ティー・アドヴァイザー」と呼ばれるボランティアが担当する。学校などに呼ばれて、児童・生徒にお茶のおいしい入れ方を指導する。それだけではない。彼らはお茶の品種や栽培、加工プロセスの知識から、お茶の歴史についても知っている。それに「研修」をうけて博物館の展示や収蔵品についてもよく知っている。市外からの観光客には要望があればいつでも観光コースのガイドを務める、「認定された」ボランティアである。さらに、新しい観光コースの発見や開発も、このボランティアの活動の一つであるかも知れないのである。そのような人を生涯学習の活動を支援する中で育てることはできないのであろうか。そのようなアドヴァイザーを育て認定し、活躍の場・機会を開拓する。それには市の観光協会や商工会、自治文化課、生涯学習課、公民館などが協力し、養成、認定、学習成果の活用への支援等を行うのである。

< 学習成果の評価サービスとそれを活かす道 >

もちろん、育て、認定したりするのはティー・アドヴァイザーだけの問題ではない。さまざまなボランティア活動に参加したり、職業活動で生かすことができるように、生涯学習としてさまざまな機会を利用して学んだ知識・技術等の獲得を、きちんと証明できるような評価サービスを行うこと、活躍の場を拡大することが重要なのである。

地域社会で活動している指導者が、学校の部活動やクラブ活動の指導者として参加する取り組みが全国の市町村で試みられ始めている。バスケット・ボールの指導が出来れば誰でもよいというわけではないであろう。児童・生徒の身体的・精神的な発達や心理を心得ていなくては指導はまかせられないかも知れない。研修を積み重ねたり、指導者としての知識・技術を「認定」するなどして、学校の先生方からも信頼できる人かどうか判断できる一つの基準を、生涯学習の成果として評価サービスを行うことが、繰り返しになるが、重要なのである。

空き教室を利用して、学習情報の提供をしたり、学習相談に応じる相談員を配置して学習活動が活発に行われるように支援することも考えられる。これには、これまで公民館活動などさまざまな機会をとらえて、いろいろな学習を積

み重ねてきた人がふさわしいかも知れない。

校庭開放には、「遊び名人」がいて子ども達に遊びの伝承を行ったり、子供会からの要請があれば出かけていく。そんな人がいてもおかしくないであろう。

博物館や図書館、公民館のボランティアとして、専門的な知識をもった人が活躍するかも知れない。そのために難しい研修会へ参加することが求められれば、しかるべき機関が研修会を開催し希望する人は参加しなければならない。

このように、市民がさまざまな場所、機会学んだことを生かし、活躍する場を開拓、開発することが重要と考えられる。おそらく、このたとえから、もっと別な内容や事例を思いつく人もいるであろう。学んだ成果を活用するような活動をする人が増えることこそ、これからの社会にとって必要なことであろう。人々が多様な活動を開始するために、学んだことと、持てる知識・技術等を認めるサービスが求められているといえよう。

< 生涯学習支援に必要な仕組み・制度 >

くどいようであるが、制度・仕組みが大切である。制度や仕組みは、つくられるとその中で人々は流れ、動いていく。制度をうまく利用して、一人一人の創造性を発揮し、思い思いの人生を作り上げていく。PRが必要なのはつくられた当初だけである。大切なのは、人々が必要と思えるような仕組みを作り上げることであろう。それは今、行政と住民・市民が一緒になり、考え出されなければならない。それができるのが「市民の会」であろう。

風が凪いできたいま、地道な生涯学習の取り組みが大切になってきている。フェスティバルのような華々しいイベントよりも、実質的な生涯学習支援が大切になってきている。社会教育活動として行われている「公民館まつり」は、生涯学習の振興を目指すフェスティバルの一つとして考えられるものである。社会教育活動が好きだったり、それが身近な学習の場であれば、その人はその機会を利用すればよい。学校で学ぶことがよいというのであれば、学校に通えばよいのである。だが、生涯学習として学んだことを生かしたいという場合、生かす道を考えなければならない。それは、一人一人の努力に関わる部分と、地域や社会が仕組みとして考えなければならない部分を持っている。

もちろん先にも述べたように、どこにどのような学習機会があるか、どこに

どのような指導者がいるか、どこにどのような団体があるかなど、学習情報の提供や相談に応じられる体制も必要であるし、自治体の生涯学習事業に小・中・高・大学などの学校と協力しあうことや、民間の教育・文化事業者の協力を得ることも必要であろう。市民の運動の場として民間企業が持つグラウンドを開放してもらうことも必要かも知れないし、ガラス工場を市民のガラス工芸を学ぶ場として開放してもらうことがあってもよいであろう。「市民の会」にはそうした要望や可能性にも目を向けてもらいたい。

いずれは、公民館での活動も、内容によっては学校での授業の一つと見なされる時が来るであろう。社会教育などの場で早くから生涯学習に取り組んでいる先輩たちに学ぶことは多いはずである。

私にとっての生涯学習

私が「生涯学習」という言葉に出会ったのは、大学2年の時でした。大学の講義の中でイギリスの教育について学んだとき、ラングラン氏の提唱したこの概念に初めて出会いました。「社会教育」という言葉（概念）しか知らなかった私は、「生涯学習」という言葉をとっても新鮮に感じ、そして衝撃をも感じました。

当時、私は家庭教育に興味を持ち、家庭での「子ども」の教育の在り方について研究しようと思っていました。しかし、学習していくと、子どもの教育は家庭だけの問題ではなく、「社会」「地域」「学校」と分けて考えてきた「教育・学習」というものが、大きな一つの流れとして捉えられたのです。“コンプスの卵”とでも言うべき発想の転換に感じました。そして、どうしてこんなことに気づけなかったのか、と思わせるほど当たり前のことでもありました。

そんな「生涯学習」に私は今、いろいろな形で取り組んでいます。「青少年相談員」として地域の子ども会活動に参加し、レクリエーションの指導をしています。また、自分たちの技術を向上させるために、いろいろな研修を行っています。「教諭」として、毎日の授業の研究はもちろん、もっともっと「よい先生」になるために学習を続けています。夏休みには大学に通ったり、コンピュータを使えるように教えてもらったり、子どもたちに何が必要かを考え、自分に足りないことはどんどん覚えていこうと努力しています。そして、子どもたちにも「学ぶ」ことの楽しさと大切さを感じてほしいと思っています。

「生涯学習」は決して特別なことではない、と私は思います。人は生まれてから死ぬまで、常に成長し続けます。その「成長」イコール「生涯学習」なのではないでしょうか。人は誰でも「もっと知りたい」という知的好奇心をもっています。それを意識できるかどうか。「好奇心」を「向上心」に変えていけるかどうか。それが「生涯学習」を意識できるかどうかの差だと思われます。

自分の生活をちょっと良くするために、ちょっと努力してみようかな、とかちょっと何かをしなくちゃ、と思えば、もう生涯学習の始まりなのではないでしょうか。

子どもの育ちを求めて

「生涯学習に取りくんでできましたか？」と問われて考えてみると、乳幼児教育や家庭教育に携わる仕事の専門性を生かし、ボランティアとして青少年の健全育成にかかわってきたことだと答えることができます。昭和48年5月に藤沢地区に住んでいたのですが、地域を動き回る中で子どもたちの遊び集団が崩壊していることに気づいたのです。とくに、異年齢の遊び集団をほとんど見かけることが無くなり、子どもの育ちに大きく影響すると思ったのです。学校教育に頼り過ぎ、必要不可欠である地域の教育力の低下を危惧した青年数人が集まり、有志子ども会「ゲラゲラクラブ」を誕生させたのです。

地域に住む、小学校1年生から3年生までを対象に募集すると18名のこどもが集まりました。この子どもたちと木曜日の4時30分から土曜日の2時から6時頃まで、伝承遊びをしたり、工作や演劇活動にも取りくみました。

少人数で始まりましたが、49年には40名、その後は100名を越えるクラブ員が集まり、浮き沈みはありましたが、25年後の現在でも130名の小学生男女（2年生～6年生）が毎週土曜日の午後集まり活動しております。年齢の異なる子どもたちが、身体を十分に動かして遊ぶ中で、助け合い、時には激しくぶつかり合い、泥々とした集団の中に身を置く体験をしています。仲間を大切に、仲間と共に好きなことに取りくむ中で、将来、社会の中で生き抜く力、人間関係を学習しているのです。「ゲラゲラクラブ」の第1回卒業生が現在は35才になり社会人として活躍しています。また、数人は「ゲラゲラクラブ」の指導員になったり、あるいは地域の少年少女サッカーチームのコーチをしたりと地域の教育力向上のために努力をしています。

現在は10数名に青年がボランティアとして子どもたちと共に活動しています。私は実践の場から身を引き、側面から援助する立場になりましたが、この25年間の経験は、クラブの構成メンバーである子どもたちにとっても、ボランティアとして中心にかかわった自分自身にとっても貴重な生涯学習への取りくみであったと思います。子どもたちから学ぶことのできた多くのことに感謝しつつ、...

中学校の部活動に協力して

中学のグラウンドに足を踏み入れて、最初にびっくりしたのは、1年生から3年生までの体力、技術もバラバラの生徒を一人の先生が面倒をみている現実であった。私がお手伝いする部活は硬式テニスのため、少年野球、少年サッカー等のように小学生時代に経験をしていないため、初歩から指導する必要があり先生の負担は相当のものであると感じた。

前々から生涯学習の一貫として、自宅前にある中学校で部活動のお手伝いをしたいという考えは持っていたが、具体的にどのような行動を起こし、誰に話を持って行けばよいか困っていたが、市役所の教育委員会に相談したら直接校長先生と話し合ってくださいとのことでしたので、自分の考え方を素直に話したら、快くお願いしますという返事を頂き、土・日の休日を利用して指導にあたっている。技術的な面は、日本テニス協会や埼玉県テニス協会主催の公認指導員に義務づけられている指導者講習会で学習した内容をベースにして教えている。メンタル面ではできるだけ多くの生徒と会話を持つように心掛けて接している。一年間指導してみて実感したことは、何人かでチームを組んで協力体制をとらないと長続きはしないということである。また顧問の先生とのコミュニケーションを密にし、指導方法のすり合わせを小まめにする事も部活動に社会人が協力参加するうえでは大切な事のひとつである。

ボランティア指導員 活動状況

月	1週	2週	3週	4週	5週	備考
H9. 4月	2人	1人		2人		
5			2	2		新入部員参加
6	1	1	2			
7	2		2			
8						
9		2		1		
10	1	2		2		
11		1	2			
12	1	1				
H10 1月				2		
2		1				

FMチャッピー 市民ボランティア・スタッフへの期待

平成9年2月1日、「エフエム茶笛」(チャッピー)本放送の開始の時点でボランティア・スタッフの登録は既に100名近くになっていました。

大変なスピードで郵政省の免許を取得し、忙しいその間にいくつもの先発局を見学して多くの勉強をしました。その内の重要なポイントの一つがボランティア・スタッフの募集と、その協力を得ることでした。

ローカルで、しかも地場資本でこのような事業を始めるといことは、大企業・商社が考える事業とは趣を大いに異とします。

ケーブルテレビを平成2年に開局し、今またコミュニティFM放送がスタートする、いずれも「株式会社」とはいうものの所謂「営利追求」とは言い難い「まちづくり企業」であり、その事業運営は大変困難なのです。

そういったマネージメントの観点からも、市民のボランティアの協力がなければならぬことを実感していました。

しかし、この入間の町で本当に大勢のボランティア・スタッフが集まるだろうか、「スタート」はいつも不安と期待がいっぱいですが、うれしい誤算でした。

集まったメンバーは、性別、年齢構成どちらをとっても理想的にバランスがとれていました。

開局3ヶ月前からお休みの日を使って研修が行われ、番組の企画をしたい人、出演して喋りたい人、放送機器の操作をしたい人、音楽の選曲をしたい人、それぞれの希望にそって準備が進められました。

ボランティアは基本的には皆素人ですから、放送内容の「品質」は千差万別、「試験放送」中は随分と失敗を重ねながらのスタートでした。はじめは、とにかく「音」が出ていることが最重要、慣れてきたところで「本放送」のスタート、もう少し慣れてくると、また次のステップへと、リスナーからの「反響」が多くなるにつれ、ボランティア・スタッフへの期待が大きくなり、注文も多くなってきました。

コミュニティFM放送は、「地域密着型」を志向しています。しかしながら、スタッフの多くはこの「地域」について知らないことが山ほどありました。

そこで、また勉強です。その勉強の成果を携えて、「地域に飛び出そう」と「取材」が板に付いてきました。「市民」であるボランティア・スタッフが地域の「市民」を取材する、或いはスタジオに招いてお話を伺う。ようやくコミュニティ放送らしくなってきました。

ケーブルテレビもエフエムも局舎の前は茶畑、後ろは林という、華やかさを期待してきた人にとっては二度と脚を向けたくないようなロケーションのせいでしょうか、スタッフの皆さんは他局に比べ、随分と落ち着いた雰囲気にも思えます。ボランティア・スタッフには、プロを目指す人、普通の人、忙しい人、暇な人、いろいろな方がいらっしゃいます。しかし、よい意味での共通点は、ボランティアを楽しんでいることかなと思います。全くの無報酬で、交通費も自己負担です。その中で、コミュニティFMのボランティアとして活動することが、生きるごとの潤いとなり、自己実現へのおおきな喜びとなることができれば、この事業を企画したものにとっても、まちづくりのために貴重な出資をしていただいた株主の皆さんにとっても、ボランティア・スタッフ自身にとっても、そしてさらにはこの入間市の全市民にとって意義あるものになることだと確信しています。

いま、ボランティア・スタッフは総勢150名になろうとしており、今年初めには組織化の動きもできました。

ボランティアを楽しむことが、同時に、学び、輝くこととなる、こんな生き方をしている仲間がますます増えることを願っています。



FM入間のスタジオにて若い人たちが楽しげに

高齢者の生涯学習と憩いの家

入間市には現在老人憩いの家が43軒あります。

人生八十年時代を迎え、戦前戦後の苦しい時代を乗り越えて来た、私達世代が高齢期入りした今日、常時考える事は、これから如何に充実した人生を送る事が出来るかに尽きます。それには先ず健康で常に「生きがい」を持つ事と思います。私は今から12年前、閑静で緑豊かな入間の地、西武ぶしニュータウンに転居し、これからの人生を如何に豊かに過ごす事ができるかと考え、有志と共に老人クラブ「はなみずき会」を設立し、スポーツによる健康保持と趣味を生かした学習や親睦を深める旅行等を含め、生涯学習の活動拠点として老人憩いの家を利用し、十分な成果を得ております。それには市の高齢者福祉課及び生涯学習課の指導があり、又、地域の公民館との連携・協力に拠るところが大きいと思います。高齢者の皆さんが、この全国的に稀にみる施設「憩いの家」を大いに利用して、地域に密着した奉仕活動や、学習の場、親睦の場として利用する事が生涯学習に結びつく事と思います。

私の会では毎月会報を発行し、現在130号を数え、148名の会員宅に配付しており、内容については会の行事予定・活動情報・教室案内・俳句の掲載等で、時には旅行の紀行文も記載し会員より喜ばれております。

又、憩いの家の使用状況は日曜祭日を除き週6日間使用し、その回数は年間230回でのべ2,300人の方が利用しており、これからも生涯学習の場として大いに利用していきたいと思っております。

朗読ボランティア「はづき」のこと

以前から朗読に興味をもっていた私は、夫の単身赴任を期に仕事を辞め、入間市社会福祉協議会主宰の朗読ボランティア養成講座に申し込み、年10回の講習を2年受け、朗読ボランティア「はづき」の一員になりました。(この講座は終了後ボランティア活動を行うという条件があります。)現在、70名余りの会員がいろいろなボランティア活動に参加しています。ここで「はづき」の活動内容を紹介します。

- ① 視覚障害者の方々のため
市報・議会だより・社協だよりの録音テープ作成
図書館依頼テープ作成(希望される本の録音テープ作成)
タウンインフォメーション(入間市関連記事)録音テープ作成
- ② 入間市老人ホーム(永仁会・聖愛園)訪問
- ③ 障害者施設(大樹の里・扇台作業所)訪問
- ④ 子ども達のために西武分館・図書館(どんぐりさんへの協力)読み聞かせ
- ⑤ FMチャッピー吹き込み(福祉のお知らせ・朗読)

その他、会員相互の親睦を計るための行事、埼玉県朗読ボランティアネットワークに関する活動・朗読以外のボランティア活動等種々行っています。

私は始めてからまだ3年余り。未熟ですが、いろいろな活動に参加しています。一番の難題はテープ吹き込みの機械操作ですが、これは何回も経験を積んでいかななくてはならないでしょう。そして聞いて下さる方が喜んで下さる様、どの様にしたら心地よく聞いていただけるか、模索中です。

人生輪廻、私も沢山の方々にお世話になり支えられています。できる範囲の中で、できる時に、できるだけことをしていきたいと思ひながら、生涯学習まっただ中を歩いています。

NPO法成立に思う

去る3月19日、NPO法（特定非営利活動促進法）が衆議院本会議において全会一致で可決・成立し、同日より30日以内に公布1年以内に施行されることになった。その目的は医療・福祉、社会教育、災害時の救援、スポーツ、環境保全、国際協力など、12分野の特定非営利活動を行う団体に法人格を付与し、市民活動の発展を促すものである。しかし、市民団体に国民が寄付した場合、税金控除するなど、寄付行為に対する税制の優遇措置は2年以内に結論を得る、との付帯決議にとどまった。NPO活動の財政的裏付けにつながる重要な課題が残されたわけである。

NPO法成立により市民活動促進に寄与するメリットとして、必ず挙げられるのは「これまでは任意団体扱いであったため、電話、事務所の契約、銀行口座開設等は代表者個人名義で行ってきた。NPO法施行により法人格が付与されれば、各種の契約を団体名義にできるため、団体のメンバーが入れ替わっても活動に支障を来すことがないので財産管理などもしやすくなる」という点である。とは言えその実は運用してみなければ分からないことが多い。また活動対象が限定されているなど、組織運営に制約があり設立時の申請手続きなどでハードルがないとは言い切れない。

海外NPOの資金力や組織力と比較すれば、日本は法的にやっとスタートラインに立ったばかりで、組織運営のノウハウ、資金集め等、試行錯誤の長い道のりがひかえている。

NPO活動のスムーズな運営の決め手は、①人材 ②法人格をえた団体の財政確立であると、さいたまNPOフォーラムやNPO研

修・情報センター開設フォーラムでも再三にわたり力説された。人材の面では、生涯学習もNPOと無縁ではない。生涯学習は社会教育（共同学習）と異なり、自主的参加・交流型学習であり、市民活動に広がりを見せ、ひいてはNPO活動に踏み込んでいく学習活動だからである。

「市民参加のまちづくり」という言葉はもうすっかり定着している。市民・行政・企業のパートナーシップなくして市民活動はあり得ない。NPOは市民参加の主体であり、また組織としてNPOがあつてこそボランティアも社会的な力が存分に発揮できる。

日本のさまざまなシステムを改革するための三本柱と称される、環境アセス法、NPO法、情報公開法は市民の味方になる法律であるが、官僚にとっては煙たいものかもしれない。昨年成立した環境アセス法につづいて、数少ない議員立法法案であったNPO法が成立したことは、「官から民へ」の転換を図る市民主権社会構築へ向けての前進となるだろう。

このように、もろもろの観点から意義深い法律であるにもかかわらず、NPO法成立後のマスコミの取り上げ方には各紙にバラツキがあり、重要視していないのかとも受け止められる。市民の反応も予想していたより盛り上がりには欠ける感がある。日本はやはりまだNPO後進国なのであろうか。NPO活動が根づき、発達することを期待する。— 1998年3月記 —

ゆとりメート

クラスメート、チームメートetc.とさまざまな「仲間」にめぐり合う。しかし、心のゆとりをもった仲間はまだ少ない。

「ゆとり」と聞くと、まず「経済的ゆとり」を思い浮かべるのが一般的である。しかし、ゆとりのルーツは「心」ではないだろうか。そして心のゆとりがあってこそ、身近にある豊かな生涯学習の土壌に目を向けることができるだろう。

経済大国日本とは名ばかりで、国民生活の質（最近やっと定着してきたクオリティー・オブ・ライフ）はといえば大国とは程遠い。スケジュールがびっしり、仕事に追われストレスの奴隷であることがステータスの象徴と勘違い、はたまた誇りにさえしている向きがある。これは金や物が価値観の尺度とまで錯覚させた高度成長期の置き土産であり、モウレツ働き蜂を美德とした頃の延長戦にすぎない。

日本人の商魂を風刺したエコノミック・アニマルという表現は一世を風靡した。これは或るアジアのマスコミ記者が思いついた造語であるが、これに市民権を与え、あたかも確立したマスコミ用語であるかの如く乱用し普及した張本人は他ならぬ日本人だと言う。この一言は対日本人イメージダウンに甚大な貢献？をし、その後遺症は今日まで尾をひいていると言っても過言ではない。

近年急増している青少年問題の原因は「ゆとり欠乏症候群」ではないだろうか。世界中の言語に翻訳され読者の心をとらえたフランスの作家サン＝テグジュペリも『たいせつなことはね、目に見えないんだよ……』と、かの有名な大人向き童話「星の王子さま」で言っている。思いやり、感謝の気持ちも「ゆとり」の賜物である。物事を心で見なければ肝心なことを見逃してしまう。

ゆとりの大切さがわかる仲間、ゆとり-mateの輪をもっと広げ、名実ともに成熟した生活の質を享受してもいい時期である。

読む人の琴線にふれる詩や文を数多く残した書家であり詩人でもある相田みつを作「人さしゆびを自分に向ける」の一節「そのうち」を、いまいちど噛みしめてみたい。

そのうち

詩・相田みつを

そのうち お金がたまったら
 そのうち 家でも建てたら
 そのうち 子供から手が放れたら
 そのうち 仕事が落ちついたら
 そのうち 時間のゆとりができたら

そのうち……
 そのうち……
 そのうち……
 できない理由を
 くりかえしているうちに
 結局は何もやらなかった
 空しい人生の幕がおいて
 頭の上に 淋しい墓標が立つ

そのうちそのうち
 日が暮れる
 いまきたこの道
 かえれない

出合いを楽しむ

入間市豊岡在住、男2人（中1、小3）の父親です。都内勤務20年になります。本業はグラフィックデザイナー。平日の帰宅は子どもたちが寝てからの方が多いため、休日は出来るだけ子ども達に関わるようにしてはいますが、中学生にもなると友達同志の遊びが主流になり、あまり“父親”ができません。友人と家族ぐるみのお付き合いが楽しく、家を訪ねたり時には招いたり、年に数回の小旅行が目標であり、息ぬきの機会でもあります。その時はもっぱら好きな写真撮影を担当しています。

我が子が幼い頃通ったおおぎ第2保育園（0歳児～3歳児・中瀬泰子園長）にも時々おじゃまして子どもたちを撮影させてもらっています。何度か通っているうちにだいたい慣れてきて子どもたちもいい表情をしてくれる。もっと通っているうちに、だんだん意識しなくなり、近づいて撮影していても自然に振る舞ってくれる。そうなるとしめたものだ。ただ、ひとりと遊び始めると皆がワッと集まる。5人も6人も“高い高い”や“おんぶ”をするとけっこう息ぎれがする。でも心地いい疲れですが…。

ここ2～3年園内のあちこちにパネル仕上げをした写真を何点か飾らせてもらっています。普段あまり見ることのない姿が見られるとあって父母や見学者には喜んでもらっている(?)らしい…。

園の行事の時もいいのですが、普通の生活の時の何気ない仕草、笑顔、涙がとっても良いと思います。自分の子どもの時は、あまり余裕がなかったせいか、今、その姿をしみじみ見つめることが出来るような気がします。

園では「おおぎべびい倶楽部」という名のOB会があります。年に数回、家族ぐるみで30～40人が集まって、「川遊び」や「バーベキュー」など楽しんでいます。この時のお父さんのはりきり方はスゴイの一言です。しばらく会ってない家族・子ども達が半年・一年でこんなに成長するとは…。それぞれの家族の子育てや親離れを見ていると実に面白いものです。

会には細かい規則はなく、集まれる時に集まれる人が、できる範囲で楽しむ、それを基本としています。

いろいろな人と出合い、いろいろな事のできる時間・環境が身近にあることに対して友人や家族・園の方々に感謝しています。



入間市文化創造イベント『いるま太鼓セッション』で倶楽部員大集合

ドイツにおける成人教育の実態

— バイエルン州を中心として —

1. はじめに

近時、我が国では生涯学習の重要性が再認識され、政府はもとより、都道府県や市町村もまた、その啓発と推進について努力している。人間市についてもその例外ではなく、数年前には、市民によって構成される「生涯学習をすすめる市民の会」が発足し、人間市における生涯学習の推進などについて検討・実践している。

生涯学習については、欧米諸国が先進例といわれており、我が国も、それを後追いする形で、生涯学習についての種々の施策が展開されてきたといっても過言ではない。しかし、実際のところ、市民レベルにおいて、欧米諸国における生涯学習の実態について知る機会は極めれ限られている。

そこで、本稿では、人間市が姉妹都市を有するドイツ・バイエルンにおける生涯学習の一端を紹介し、人間市における生涯学習の今後の展開についての何らかの示唆を得たいと考える。

2. 成人教育の担い手としての国民大学校 (Volkshochschule)

ドイツの国民大学校は、成人教育を推進するために、19世紀末に北欧を模範として設立された学校であるが、正式な学校ではなく、市民大学的な存在である。現在、西部(旧西)ドイツには、約850の国民大学校と、約3800の支部が存在し、ドイツにおける成人教育の拠点として機能している。

通常、国民大学校の主催者は、市町村、教会や労働組合などの団体であり、それらは州の財政的な補助を受けながら、政党や宗教を超えて活動している。また、個々の国民大学校は、地域レベル、州レベル、連邦レベルの上部組織の傘下にある。その最上部組織はドイツ国民学校連盟であり、末端の国民大学校までをも統括している。

国民大学校の講座の多くは夜間に開講されるが、昼間はもとより数日間に亘

る宿泊講座も設けられており、バラエティーに富んだ内容となっている。

国民大学校の講師は、専任が約5600人、兼職が約13万人となっており、後者に依存していることは明らかである。

1989年度には、約40万の講座を開講し、それには約550万人が参加している。また、国民大学校は、正規の講座の他、個別・単発的な行事を開催しており、約9万の行事に、約400万人が参加している。

上述したように、国民大学校は正式な学校ではないために、本来、卒業であるとか修了という概念はないはずであるが、昨今では、語学、自然科学、技術のような一部の分野では修了証が授与されるようになり、1989年度には、約1万5000人が試験に合格し、修了証を授与されている。

3. バイエルン州の国民大学校

バイエルン州は、ドイツの南部に位置する州であり、人口は約120万人、州都はミュンヘンである。人間市の姉妹都市であるヴォルフラーツハウゼン市もバイエルン州に属し、州都ミュンヘンから南へ約30キロメートル、郊外電車で約50分の終点に位置する。

ドイツでは、多くの権限が州に委譲されており、教育に関する権限も州の権限とされている。そのため、連邦には、我が国におけるような文部省に相当する連邦機関は存在しない。したがって、成人教育に関しても、州が立法権を有している。

(1) 法的根拠

バイエルン州憲法によれば、成人教育もまた自治体固有の活動範囲に含まれると規定され(83条1項)、さらに、成人教育は、国民大学校およびその他の公的手段によって支援された施設を通して推進されねばならないと規定されている(139条)。

また、バイエルン州では、1974年に成人教育推進法が制定され、この法律によれば、州は、上述した憲法に基づく自治体の任務(83条1項)とは別

に、全州において、広汎な教育の提供を有する相応の施設を整備するために、財政的およびその他の負担を通して成人教育を推進すべきことが規定されている（2条）。

(2) 具体的目的

成人教育が実施される具体的な目的としては、以下の9点が掲げられている。

- ①自主的かつ同権的教育を主たる領域とする教育を行う（上記の推進法1条参照）。
- ②新たな要請と社会、政治および経済の変化に対応する。
- ③広汎な教育の提供をもって、多様な人々および参加者の職業的興味に応える。
- ④多様な方法においてボランティア活動を促進する。
- ⑤少ない専任職員をもって多くの教育を提供する。
- ⑥現在および将来において多くの問題を有する世界についての情報を提供する。
- ⑦社会における弱者を考慮し、それを援助する。
- ⑧人々をして退職後における準備をなさしめ、高齢期を迎えさせる。
- ⑨語学講座および種々の文化的な教育の提供をもって、世界理解および欧州の統合を促進する。

(3) 講座参加者と時間数

バイエルン州では、1996年に23万講座、170万時間（ただし、1回の開講時間を2時間とする）が開講され、520万人が受講した。受講者による講座の延時間は5800万時間（同様に、1回の開講時間を2時間とする）である。このことから、一人が複数の講座を受講していることが明らかとなる。また、以上の数字は漸増傾向にあるといわれており、人々の成人教育に対する熱意を伺い知ることができる。

(4) 財政的負担

国民大学校の経費は、主として受講者による受講料によって支弁されているが、市町村および州からの補助もなされている。

市町村からの補助金は、後述する州からの補助金を下回ることができず、概ね、受講者一人当たりで0.15マルク～14.5マルクの補助金が交付されている。州からの補助金は、上述した成人教育促進法に基づくものであるが、州の財政難により漸減傾向にある。すなわち、州による補助金を年次別に比較すると、1974年には20%であったものが、1980年には16%、1990年には10%、1995年には9%に削減されている。ちなみに9%という数字は、約3600万マルクであり、これは、州の文化関係予算のなかでは、その0.22%を占めるに過ぎず、たとえば、ギムナジウム関係予算が、その20.8%を占めるのと比較すれば、格段の差を見出すことができる。

そのため、国民大学校に関する団体においては、州からの補助金を1974年における20%のレベルにまで回復させるよう種々の運動を展開している。

4. ヴォルフラーツハウゼン市の国民大学校

ヴォルフラーツハウゼン市の国民大学校は、音楽学校、警察署の近くの街の中心部に位置している。この国民大学校は登記済社団（我が国の社団法人に相当する法人格）を有し、少なくとも2人の職員が事務を担当している。

1996年の秋における窓口業務は、月曜日～木曜日までの9:00～12:00、そして、木曜日については、さらに16:00～18:00までとなっている。

1996年の秋学期における講座の開講内容は、教養講座25、健康講座48、語学講座50、職業講座14、家政講座10、創作講座27、心理講座5が開講される予定となっていた。各講座は1回が概ね90分～120分であり、受講料は講座の種類・内容によって異なり、また学生割引などがあるものの、人間市の各種講座よりも割高の感がする。講座の内容については、健康や語学に関するものが多いことは人間市と類似しているが、日本の人間市を姉妹都市

としながらも、少なくとも、1996年の秋学期には日本語講座が開講されていないことは、やはり日本という国が、未だに遠い極東の国という理由からであろうか。

一つの講座は、8人以上で構成されるが、語学講座については、その教育効果を勘案してのことであろうが、20人以下となっている。また、受講者が少ない場合には、開講されない場合もある。

講座の開講場所としては、国民大学の教室はもとより、市立学校の教室、その他の公共施設も利用されている。

5. ドイツの成人教育の特徴

すでに気づかれている方も多と思われるが、我が国では生涯学習と呼ばれているが、ドイツでは成人教育と呼ばれている。人間市も同様であるが、我が国では、生涯学習の対象者を男女、年齢を超えた老若男女としているが、ドイツでは、成人を主たる対象としている。未就学児、児童、生徒層が対象とされていない理由としては、これらの者については、家庭、学校、地域、教会において学習の機会が与えられ、また与えられるべきと考えているものと思われる。また、ドイツでは、少なくとも、自己学習については、市民の一人ひとりが成熟しているために、自治体としては、教育の機会を整備するで足りているとの判断ができよう。そして、このように、市民が自己学習について成熟している背景には、一つには、ライフ・スタイルの違いを掲げることができよう。ドイツの人々にとっては、たとえば、自由時間、休暇、快適といった言葉が重要視されている。人々は、週末には趣味を生かした活動をなし、年に数回は休暇をとる。それも、家族と一緒に過ごす。そのため、余暇を利用するためには貪欲となり、自己学習がなされているのではないだろうか。二つに、ドイツでは、宗教たるキリスト教抜きでは語ることができないが、キリスト教では、種々の催物をはじめ、種々のヴォランティア活動も積極的に行っている。そのため、そのような参加・活動を通して、併せて、自己学習も啓発されているものと考えられる。

さらに、国民大学の講座受講料が入間市よりも割高であることは上述した

が、ドイツでは、受益者負担の考え方が徹底しているように思える。たとえば、我が国においても、図書館は生涯学習の拠点の一つとして重視されており、そして、その利用は原則として無料である。しかし、ドイツでは、図書館は市立図書館であったとしても有料である。これは、ヴォルフラーツハウゼン市にかぎったことではない。筆者がかつて滞在していた北部のミュンスター市でも同様であった。

ドイツと日本を安易に比較することは危険であるが、ドイツでの生活体験者として、ドイツ人における生活の精神的な余裕が、根底にあり、それが、生涯学習、成人教育の側面にも反映されているように思えてならない。

6. おわりに（入間市の生涯学習への提言）

- ①入間市における生涯学習は、今後も公民館を拠点として推進されるものと思われる。しかし、実際に公民館が生涯学習の場として機能するためには、従来の地域を越えた活動、同権的思想の徹底、種々の内容とレベルを有する講座の開設などが望まれる。もとより、公民館の活動については社会教育法の規定が遵守されねばならないが、多くの問題点は、規定の解釈・運用によって解決できると考えられる。
- ②生涯学習の場として、学校の空き教室など、既存の公共施設を積極的に活用することが望まれる。また、民間の施設との一定の協力関係が結ばれるとすれば、さらに効果的になるものと考えられる。
- ③将来的には、生涯学習に関する情報の集約・発信基地として、生涯学習センター的な機能を有する施設の開設が望まれるが、当面は、入間市役所内の生涯学習課がこれを代行することが望まれる。
- ④所定の講座修了者に修了証を発行することにより、生涯学習への意欲を啓発するとともに、循環型生涯学習を確立することが望まれる。
- ⑤今後の生涯学習の展開に際しては、行政と市民との一層の連携・共働関係が必要とされるために、それについての、自主的、積極的および定期的な点検・評価がなされねばならないものとする。

自分流好き勝手に充実した人生を

「入間市生涯学習をすすめる市民の会」の会員でありながら、私はこの名前は何かとかならないかと思っている。第1に「しょうがい」は語呂が悪く、ワープロを叩くまでもなく「傷害」か「障害」のイメージが先行する。学習という言葉だって幼稚園の時代から「お絵かき学習」がイヤで泣いて帰ってきた思い出しかない。人間は誰でも、時には学習することが有意義と感ずることはあっても、「生涯学習」すなわち死ぬまで学習するなんてことは真っ平で、誰も望んでいるとは思われない、むしろ学んだことをどう役立てるかを考えるのが人間の本性ではあるまいか。

そこで「生涯学習」について真面目に議論するほどナンセンスなことはないと考える。ましてやこれを「すすめる」なんてことはおこがましい。議論したりすすめたりするものではなく、自ら実践することに意味がある。何を実践するかと言えば、自分が好きなことを自分流に、それが人様の迷惑にならない、できればお役に立つことができれば最高だと思っている。

「生涯学習」というと難しそうだが、自分の人生をどのように楽しみ充実したものにしようかと言うことであって、他人に指図されたり、役所に啓発されてやる性質のものではない。「生き甲斐」とか「生活の充実」あるいは「自己実現」について、私は次のように理解している。「好きなことを自分流にやって、それが人様のお役に立ち評価される生き方」がいいと思う。さてそこで「市民の会」の名称であるが、「自分流好き勝手に支援する会」なんていうのはどうだろうか。これは半分冗談のつもりで考えたが、半分は本気である。

最近では長引く不況のせいかもしれないが、男に元気がないのに比べて、女の元気さだけが目に付く。海外旅行でも国内旅行でも、旅行者の8-9割は女性であり、高級レストランに行くほど女性の数に圧倒される。大学キャンパスでも、女子学生が堂々と胸を張って談笑している直ぐ脇を、男子学生がこそこそ小さくなって通り過ぎて行く。経済社会が成熟化するほど女性天下になるという説もあるそうだ。そう言えば高度成長期には、男はもっと元気よく働き、女性がもう少し優しくなったような気もする。しかしこの国の経済の停滞と金融ビッグバンの混迷は、空洞化で停滞気味の「製造業」の復活と、元気な男のリゲイン効果なしには救い切れないと考えるのも杞憂でなければ幸いである。

成熟化社会を特徴づけるものは、少子化・高齢化、国際化・グローバルイゼーション、情報の高度化、精緻化、迅速化、かつ経済のソフト化サービス化であると思われる。こうした環境変化に対して、戸惑いを感じて、不適応症状を引き起こして

いるのが男性であり、巧く順応して、わが世の春を謳歌しているのが女性である。わが「市民の会」も、こうした成熟化時代のリード役として、女性パワーが主役で頑張っており、役所の論理に左右されず、市民の立場で、たくましく自由で伸び伸びと、新しい時代を切り開いていけばよいと思う。

女性が最も輝いて見えるのが結婚式であり、その招待には万難を排して出席することにしている。多いときで一年間に17回、媒酌人を年4回引き受けたこともあり、一度も断ったことがないのが自慢である。結婚式の「はしご」をしたことも何度かあり、屋に富山で出席し、夕方の虎ノ門に間に合わせたこともある。もちろん飛行機、そこまでしなくてもと言われるが、ご当人にとってみると「一生に一度」のつもり（最近では成田離婚が冗談の世界ではないらしい）であるから、多少の無理をしても皆勤を通してはいる。

趣味というより好きなことと言えば、山と旅行、テニスと詩吟である。父が木材業をしていた関係（だから木... 気が多いとよく言われる）と7人兄弟の長男で後継者として育てられたため、幼少の頃からよく山仕事や製材工場の手伝い（その辛さは誰も分からないと思う）をさせられた。杉檜植え、下草刈り、枝落とし、雪起こし、薪を束ねて運ぶ作業、トラックの積み下ろし作業等はベテランであり、それに畑もやっていたので1年中仕事があり、学校は3の次4の次であった。

しかし今では、山歩きが楽しめる身分になった。山歩きをしていると妙に気が落ち着き、仕事の面でも良い知恵が浮かぶから不思議なものである。旅行も入れて月に2-3回のペース、旅行と言ってもできるだけ歩く旅行を心掛けている。海外旅行でも運動靴は必携で、人より1時間早起きをして町を一周してくると、町の印象が強くなり、旅の楽しみを2倍3倍も味わうことができる。

テニス歴は20年になり、週1-2回、女房・子供あるいは友人と楽しむことにしているが、最近では3人の子供たちにも勝てなくなってきて、山登りでは感じたことのない「年齢の差」をつくづく感じつつ、それでも「年齢に応じたテニス」を心掛けることにしている。誰か教えて欲しい。「若者に打ち勝つテニス」を。

「詩吟」道も20年になるからベテランの部類に入り、教えてという話もあるが、まだ修行中であり、元々私は教えるのがあまり好きでも得意でもない。過去に全国大会で3度入賞したこともあって自信がないわけではないが、教えるとなるとまた別問題。私の詩吟は、先生のお宅と車の中だけが道場であって、それ以外の場所で行う気もゆとりもないのが実状。

私にはまだ旅してみたい所が200箇所ぐらいあるし、やってみたくとも限りなくある。あと50年は元気で生きていないと元がとれないと考えている。しかし元が取れなかったと後悔しつつ、くたばるのが人生かも知れない。

芸術は心を育てる 遊びは人間を育てる

今、子どもたちは生きにくい厳しい時代にいます。自殺や様々な事件は、このことを物語っています。「一体どう生きたらよいのか。どういう自分であつたら良いのかがわからない。自分の居場所がない。夢中になれない。夢がいつのまにか消えてしまっている」のです。「心の教育」と言われながら、具体的なものがなかなか見いだせないなかで、子どもたちは日々追いつめられています。21世紀を生きる子どもたちが、豊かな子ども時代を過ごせることこそ、今の大人の責任だと思っています。

私達おやこ劇場は、「すぐれた児童文化に接し、子どもたちの友情と自主性を育み、感動するしなやかな心とたくましい創造力に富んだ子どもの成長をはかります。」(劇場規約 — 3)を目的に、入間市で18年間活動を続けている会員制の文化団体です。

生の舞台芸術を鑑賞すること、異年齢の子どもたちが自主的に自分たちの活動(おやこまつり・キャンプ・ワークショップ・合宿・交流会・遊びの会等々)を創りだすことを大切にしています。これらの体験は、子どもの心の成長にとって欠くことのできない貴重なものであると同時に、大人にとっても他人と共生することを学ぶ良い機会になっています。

生の舞台芸術を鑑賞することを、私達は「例会」と言います。この例会をより楽しみに待つために、例会当番を中心に、事前の様々な取り組みを持っています。劇団の関係者の話を聞いたり、人形や猫の耳作りだったり、あるいは交流会など親と子が共通の場をもつことを大切にしています。また、自主活動においては、すべて実行委員会を立ち上げて、一つ一つ決めていきます。例えば高学年キャンプは、最初意見も出ず、会の進め方もわからない子どもたちが、回を重ねる毎にきちんと議論できるようになっていきます。キャンプが終わった頃には、達成感と自信で皆よい顔になっています。この顔を見るのが、とても楽しみです。私達大人はややもすると「親」になり、つい管理・保護してまいがちですが、子どもの意見を大切に、子どもと向き合い共に学んでいます。

「子どもに夢を!たくましく豊かな創造性を!」を合い言葉に、全国で760劇場46万人、埼玉県には22劇場1万3千人が、入間市では700人の会員が地域で様々な活動を繰り広げています。

今年、埼玉県すべての人たちの文化・芸術への出会いの場として、「人とアートに夢中です」をテーマに、『第2回子どもの舞台芸術祭 彩・幸・祭』を開催します。生の舞台芸術、子どもの表現・創造活動、子ども自身の企画・運営活動、地域のいろいろな団体・個人との共催を柱に、入間市でも8つの舞台芸術鑑賞、4つのワークショップ、また小学生を対象に「忍者ごっこ」が、各地域ですべての人に開かれたものとして開催されます。

私達は願っています。逞しく心豊かに生きていけるように、日常生活では味わえない体験や感動を通して、「自主性」「創造性」「友情」を育み、子どもも大人も共に育ち合う事を。あなたも一緒に大勢の仲間と共有しませんか。おやこ劇場は、いつでも、どなたでも入会できます。

社会の現実には厳しいです。「自分の所さえ良ければ」という大人があまりにも多いのです。この事が子ども社会をより厳しくしているのです。大人が思いやりを持っていないのに、子どもたちがどうして持てるのでしょうか。まず大人が変わらなければ、子どもたちの社会は良くはならないでしょう。本気で子どもと向き合う大人が多ければ多いほど、今の閉塞状態を開くことができる、と思っています。

21世紀に生きる子どもたちに、輝く未来を用意することは、私たち大人の義務ではないでしょうか。



高学年キャンプにて

空耳・生涯学習

かつてタモリの空耳アワーという番組を見たことがある。外国語の歌を聞いていると、その歌詞の一部がおかしな日本語に聞こえ、テレビの画面の中にはそれに合わせた映像が現れ、視聴者が大笑いするというものだった。音のないところに音を聞いたようなという本来の空耳ではなく、むしろ聞き間違い、あるいは勝手な解釈とでもいうものだった。What time is it now? を「掘ったイモいずるな!」と落語の枕に使っているのと同じである。日本語でも聞き間違いを笑いのネタにするのは常套、これが外国語、ことにあまり聞き慣れない言語については、いくらでもででくる。

子どもが7才の時、フランス語が全く理解できない状態で、パリのカトリック系の現地校に入学させ、1ヶ月目に彼が体得したのは、下校する時、尼さんの恰好の先生には「坊さん」年配の女性舎監には「オバァ」といえば、なんだかその場がおさまるということだった。Bon soir. (ボンソワール) Au revoir. (オルヴォアール) 要するに、子どもたちが口々に「さよなら」と言っていたのにうまく合っただけだったのだが。

フランス語は母音が16音もあり、文字を覚えた時からアイウエオの5音にしか分類していない日本人に、その16種を判別せよというのは大変無理がある。もっとも、私たちは、無意識のうちに、フランス語の各母音に相当する微妙な音を出していると、演歌と時代劇に熱中している在日フランス人が断言していた。さておき、聞いたことのない音を自分のたまたま思い浮かべたイメージとともに自分の持っている音の中で置き換えてしまう事を人はよく好む。だから、空耳アワーのような番組が生きながらえたのだろう。

1965年のユネスコ成人教育会議で初めて「生涯教育」の概念が打ち出され、それが文部省に、そして県レベルに、そして、市町村に降ってくる。我が人間市でもようやく本気で考えようということになる。

生涯学習とは何なのか? 何をしたらよいのか?

30年の流れの中で、何だかこの空耳アワーの図式が浮かぶ。都合良く勝手に解釈、そのまま納得、そうして日本独特の、各市町村独特の「生涯学習」が生まれてきた。

1997年の夏、「生涯学習の眼」でパリを訪れ、ユネスコの職員の話聞くことができた。神奈川県某市がパリまで視察に来たそうだ。「何をしたらいいかわからない」と。しかし、ヨーロッパでは、日本のような生涯学習推進の形はみられない。退職者、高齢者のための大学開放講座などの市民の自発的で高度な学習を支える仕組みは伝統があり、自治体が推進する成人教育はむしろ、義務教育中退者と膨大な数の移民とその子どもたちがきちんと就労できることを目指したプログラムが多い。K市の視察団はかえって混乱して帰られたのではないだろうか。

さて、日本に戻って周囲のまちを見渡すと、またこの空耳方式である。

「生涯学習」「女性政策」「行政改革」... 天から次々に命題が降ってきた時、都合良く勝手に解釈、そのまま納得、そうしているところが多いのではないか。それでもいいか。都合良くということは、地域に根ざしたと言い換えられているから。地方分権化を意識して、これからこういう傾向はもっと進むかもしれない。それも、いいか。個性的なまちが増えた方が楽しいし。

中でも「生涯学習」は、「まちづくり」と結びつけば何でもアリで、『空耳』しやすい部門である。

いち早く、ハイ、ハイできました! と名乗りをあげるまち、すばやく独自のシステム、イベントを打ち出し、造語と当て字と派手なキャッチコピーで宣伝。

— 何だか違うような気がする... 少なくとも人間市には合わないようだ...

他方、じっくり周りを見渡して効率よくまとめるまち、無難なのは『定番グッズ』からとりかかることである。大綱、推進計画、審議会、センター建設、ガイドブック、情報紙、啓発ポスターに標語、人材バンクにコンピュータシステム、出前講座...

— その実態は? 市民がどれだけ乗ったのか?

— 早々と建設された生涯学習センターは、どれだけ機能しているのか?

入間市は、時間をかけながら『定番』を幾つかクリアしてきた。積極性の欠如による時間の経過ではなかった。私たち市民の声を充分取り入れたものを創っていくには気の遠くなるような話し合いが必要だった。これまで3年間の市民と行政の会議数の多さは他市に例を見ないはずである。たとえば、行政側が用意していた推進計画は、数回の検討会議を経て3ヶ月後の発行予定を1年以上延期して討議を繰り返してきたものである。情報紙発行、フェスティバル開催についてもしかり。

さて、次に何をしたら良いだろう？ 入間市に都合の良い「生涯学習」の解釈とは？

入間は市民の生涯学習活動が充分盛んなところであると感じている。ただ、それをどう表したらよいか、その手立てを模索中である。例えば、近隣市にくらべとても多い14の公民館はいつも盛況、新しいサークルが場所を確保するのがむずかしい館もある。短い時間のすきま貸しのサービスをしている館もある。サークルはこれからもどんどん分裂増殖していきそうだ。各体育施設も同様。スポーツ振興のシステムは早くから整備されている。老人憩いの家は県下一の数を誇る。高齢者も元気だ。集会所、民間施設もよく利用されている。

そして、このような活発な動きを自ら推進してきた市民が大勢いる。

この2、3年、県の文化振興補助事業で入間市の団体の申請件数が増えている。つまりこのまちでは市民の自主文化事業がとても盛んなのである。

企画から運営、観客動員、資金集め... 「ちから」のある市民が多い。

バレエ公演、子ども達のジャズダンスグループの公演、若いお母さんたちがプロのバンドを呼んで開いた子どものためのコンサート等いずれも満席、高額チケットも早々に完売している。地区公民館の運営審議委員さんたちが中心になって地域の人達とつくった手作りサロンコンサートは回を重ね、とうとうホール公演し寄付金を集めて公民館に置くグランドピアノまで買ってしまったのである。それぞれの内容も以前にくらべ、他市にくらべ、より高くなり、オペラでもミュージカルでも、芝居もオリジナル物も出来る「ひと」が出てきた。

また、当然の事ながら、市民は身近な場所の使い方がうまい。豊岡教会での声楽コンサート、高倉寺の庭を使ったパフォーマンス、ユニークな建築の東野高校での定期的なプロのコンサート、西洋館の室内楽、建築アトリエ独楽蔵でのイベント、お寿司屋さんや喫茶店での落語会、展覧会等々、市民ならではの細やかなネットワークで、それぞれの空間にぴったり合ったイベントを演出してきた。

今年は、19才の若者たちが演劇公演を2日間で3回、自主公演する。大人の世話にもならず、さっさと県の補助金をもらって。夏にはおじさん達がジャズコンサートを企画している。若者もおじさんも公民館や行政のしかける行事に来なかった人種だ。そして、いうまでもなく、いつも元気なおばさん達のしかけるイベントもめじろ押し。

行政が把握しきっていないこのような市民の活力ある動きを捉えて、みんなに知らせたい。そうすれば、また元気を出す人が現れてくるだろう。新しい結びつきが生まれるだろう。市民の「ちから」を時と場合に応じていつでも柔軟に集約できる体制ができること、これが最終目標、と考えている。

また、市内の情報を丁寧に集めることによって、入間市民の生涯学習の全容が見えてきた時、学校との関わり、子どもたちへの地域の教育力、入間都民のおじさん達の行く末などのウィークポイントがさらにはっきり浮かび上がってくるに違いない。情報紙「かがやく」や小冊子「かがやく SPECIAL」、生涯学習フェスティバルが多少なりともこのような市民情報集約・発信に役立てば幸い。今年は、とりあえず情報集めに精出そう。

これが私の空耳生涯学習推進計画である。

自分流生き方 さがしてみよう

< 所沢女性センターにて >

「おはよう」「お元気ですか」きょうも仲間が集まってくる。所沢の自主学習塾“さんさん会”（会員37名、3年前に発足）月1回の例会である。土曜日朝9時、当番は円座に机を並べ、演題を貼り、受け付けを始める。今月の講師は会員のWさん（所沢市史研究家）です。題は『湖底に沈む村』、東京に水を送るために村を湖の底にした村民の歴史だった。Wさんの話に一時間耳を傾けた後、講師を囲むディスカッションが一時間、白熱した顔、顔、顔、皆が一番生き生きした時間です。

< ここでちょっと辛口ですが... >

女性は二十代よりPTA、自治会など地域社会へ進出している。子育て修了後は益々磨きがかかり伸び伸びとやっている。しかしサラリーマン諸氏はいかがでしょうか。仕事に明け暮れ、ゴルフ、飲み会等々プライベートまで殆ど仕事絡み。さて、定年になった時、お隣のご主人のお顔は？ ましてや地域の図書館や公民館等どこにあるか解りませんよね。

< 地域デビューしてみませんか？ >

リタイアされた方は勿論のこと、現役の今から月1回だけ出かけてください。そこで聴くことのすばらしさ、目新しさを感じ、又、講師に決まった時は情報収集、資料作りのため図書館、博物館を走り回り、そしていつか、自分流の生き方を見つけてしまうことでしょう。

< 終の栖“いるま”で >

これは勤務地所沢で「さんさん会に来る人この指とまれ」とひとさし指を出し、事務局を担当している私が皆さんの笑顔に出逢った喜びを語ったものですが、自分の終の栖（この美しい緑の町いるま）でも、このような会ができ、今まですれ違っていた人と出逢い、触れ合い、学ぶ楽しさ、伝える喜びを共感できたとき、本当の意味の私の生涯学習が始まるような気がいたします。

入間市生涯学習をすすめる市民の会 委員名簿

(1998年3月現在)

	氏名	活動分野等
1	石川 経造 ^{けいぞう}	老人会（はなみずき会）会長
2	栗原 良子 ^{くりはら}	東野高校講師（現代詩）
3	清水 薫	都市計画コンサルタント
4	下野 武司 ^{しも の}	城西大学経済学部教授 日本山岳会会員
5	杉山 若江	公務員
6	鈴木 豊士 ^{とよし}	入間ケーブルテレビ・FM入間副社長
7	関根 栄一	会社役員 入間茶まつり実行委員長
8	塚田とも子	会社員 詩吟教授 健康生きがいづくりアドバイザー
9	並本 寿紘 ^{なみもと としひろ}	会社員 日本テニス協会公認指導員
10	西久保夏代	小学校教諭・青少年相談員
11	長谷川正子 ^{まさこ}	会議通訳・技術翻訳（スペイン語）
12	増岡 達也	グラフィックデザイナー
13	松永 輝義 ^{てるよし}	幼児・家庭・青少年教育専門 社会教育委員 中央公民館運営審議委員
14	三浦はるみ	入間おやこ劇場代表 埼玉県子ども劇場おやこ劇場連絡協議会副代表
15	三木 清始 ^{きよし}	会社員 体育指導員 入間市社交ダンス連合会長
16	室山 茂子 ^{むろやま}	画家
17	山尾 聖子	杉野女子大学講師（フランス語） 二八落語会主宰

協力委員

18	鍛冶 信雄	会社員
19	庄 菊博	専修大学教授
20	山本 和人 ^{かずひと}	東京家政大学教授
21	中込 紀子 ^{なかみ}	朗読ボランティア
22	中内 丈夫	黒須中学校校長

市民側の生涯学習推進組織として発足後3年を迎えた入間市生涯学習をすすめる市民の会は、毎月1回の定例会及び各スタッフ会議、関係機関、団体との話し合いを積極的にすすめ、年間130日以上活動をしました。

生涯学習情報紙「かがやく」の発行、生涯学習フェスティバルの開催も軌道に乗り、多くの市民や関係機関の職員と連携した事業展開ができるようになった。委員の意識も高まり、他市への研修にも積極的に参加し、自ら数々の報告書をまとめるようになった。

1 推進体制の整備に関する事業

(1) 市側の推進組織及び生涯学習関係団体との意見交換の実施

公民館職員部会と意見交換を行う。

- ◆7月16日(水) 宮寺公民館 委員9名、公民館職員25名
内容 第3回生涯学習フェスティバルの開催について
生涯学習ガイドブックについて

- ◆9月17日(水) 藤の台公民館 委員5名、公民館職員24名
内容 第3回生涯学習フェスティバルについて
生涯学習ガイドブックについて

(2) 生涯学習についての研修会等の実施、参加

- ◆7月3日(木) 『生涯学習』徹底追求研修会開催 産業文化センター
内容 日本における生涯学習の取組みと現状 講師 田丸淳哉氏
参加者 生涯学習をすすめる市民の会委員 12名
市職員、公民館運営審議委員等 40名 合計52名

- ◆8月2日～3日 宿泊研修会 長野県穂高町 幼児教育研究所
内容 『生涯学習』についての徹底討論 参加者 7名

- ◆12月6日 公開ディスカッション開催(生涯学習フェスティバル)
テーマ「入間の生涯学習の未来を語ろう」参加 47名 資料参照

- ◆2月1日(日) さいたまNPOフォーラムへの参加
場所 浦和市商工会議所会館ホール 参加 2名

- ◆2月15日(日) 日高市・大井町生涯学習フェスティバルの見学
参加者 委員3名 事務局2名

- ◆2月22日(日) 栃木県小山市立生涯学習センター視察 参加12名
内容 生涯学習推進の基本的な考え方について
生涯学習センターの取り組みについて

- ◆2月22日(日) NPO研修・情報センター開設フォーラム(国立市)
参加 委員1名

- ◆3月14日(土) 日高市視察 参加 委員6名 事務局2名
内容 生涯学習センター見学・フューチャー(学習支援者)との意見交換
市民自主学习団体ソクラテスの会との意見交換

- ◆3月23日(月) 生涯学習をすすめる所沢市民会議との意見交換
場所 所沢市民文化センター 参加者 9名

2 生涯学習の普及・奨励に関する事業

- (1) 生涯学習支援ステッカーの作成 7000枚
- (2) 生涯学習関連番組の制作を入間ケーブルテレビに依頼
市内で「あなたの生涯学習って何ですか」のインタビューの収集・編集
1分間のスポット番組を制作・放送を行う(9月～3月)

3 学習情報の提供、学習相談体制の整備に関する事業

- (1) 生涯学習情報紙「かがやく」の発行
情報紙編集スタッフ4名と事務局で企画編集、生涯学習課予算で発行
・仕様 A4版 4ページ 各45,000部
・発行日 第5号 平成9年10月15日
" 第6号 平成10年3月15日
・配付方法 年2回、『広報いるま』とともに全戸配付
- (2) 生涯学習ガイドブックの発行についての提言
重複する記述、市民が必要としない無駄な情報を整理統合する事、
他の生涯学習関連施設職員との合同会議等を提言

4 生涯学習の推進に関する事業

- (1) 生涯学習フェスティバルの開催
各公民館、児童センター、図書館、博物館、振興公社などと連携し
実行委員会を組織し、第3回いるま生涯学習フェスティバルを開催
・期日 平成9年12月7日(日)
・会場 入間市産業文化センター、児童センター他

- ・テーマ 『くらしの中の生涯学習』
 - ・内容 ◇記念講演会「くらし・経済・生涯学習」 参加 400名
◇記念誌「かがやくSpecial」の発行
◇公開ディスカッション「いるまの生涯学習の未来を語ろう」参加47名
◇学習活動の成果の発表（実演、展示）
◇パネル展示
◇生涯学習情報交換コーナー
 - ・参加 55団体 一般参加者 2,000人
- (2) 広報紙をつくる講座の開催
- ① 広報広聴課と連携し、PTAだより編集委員などを対象に広報紙編集基礎講座を開催、各広報紙についてのアドバイスや意見交換を行う。
期日 6月7日、14日、21日
内容 広報誌編集の基礎、元コンクール審査員のアドバイス等
参加者 生涯学習をすすめる市民の会委員のべ12名
PTAだより編集委員、市内民間情報紙発行者等のべ63名
 - ② 第3回いるま生涯学習フェスティバルで「私達の広報紙自慢コーナー」開設
市内小・中学校PTAだより、企業広報紙、民間情報紙などを掲示
担当者による座談会を開催する。 参加 15団体
 - ③ 広報紙講座参加者を対象に、本年度作成した情報紙交換と意見交換
3月14日（土）中央公民館 参加10団体
- (3) 生涯学習関係機関、団体が行う事業への協力・支援
- 関係機関、団体と連携して、入間市文化創造プロジェクトの一環として、音楽・演劇などの市民芸術・文化活動を積極的に支援する。
- カントリーエイド入間 事前打合せ、当日模擬店運営
・5月24日（土） 黒須市民運動場及びその周辺（12名参加）
 - 茶の都 薪狂言 （担当委員に連絡せず）
・9月6日（土） 入間市博物館
 - 太鼓セッション （万燈会と兼任2名参加）
・9月14日（日） 入間市博物館
 - サロンコンサート 事前打合せ、当日手伝い（2名参加）
・9月27日（土） 入間市産業市文化センター
・12月14日（日） " （加計外事業外となる）

- 第2回F777スタ in入間 入間市産業文化センター
・1月31日（土）、2月1日（日）、7日（土）、8日（日）
広報パンフ作成担当、当日手伝い（4名参加）
- (4) 家庭教育講座「今、子どもの環境を問う」を開催
中央公民館・児童センター・子ども会育成会・入間遊び場づくり協会
・入間おやこ劇場と連携して実行委員会を組織。
講師謝礼等市民の会で負担 実行委員2名参加
（講演会）10月5日（日）東町公民館 テーマ 『子どもの生活と地域』
講師 天野秀昭氏（羽根木プレイパークリーダー）
（実践Ⅰ）11月16日（日） 富士見公園 「竹を使う遊びに挑戦」
（実践Ⅱ）11月30日（日） 富士見公園 「ペットボトルキャップを飛ばそう」
- 5 後援事業
- ・「山菜研究」ハイキング
平成9年6月7日（土）新潟県入広瀬村「山菜王国浅間荘」
内容 山菜についてのお話と自然散策 講師 片岡博氏
- 6 生涯学習に関する調査・研究
- 調査・研究スタッフが各自資料収集・研修・研究する。
- ・中学校部活動における民間ボランティア指導員導入について（並本）
 - ・NPO法案について（長谷川）
 - ・フランスの成人教育について（山尾）
 - ・97年7月第5回国際成人教育会議のガイド
（篠原徹也社会教育指導員が邦文レジュメ作成）
 - ・子どもに対する地域の教育力について（松永）
 - ・経済と生涯学習の関わりについて（下野）
 - ・高校公開講座について（栗原）
- 7 コーディネート事業
- ・公民館、博物館、保育園、福祉施設に講師紹介
家庭教育、舞踊、美術教育、生涯学習、音楽、古典芸能 8件
 - ・生涯学習フェスティバルに、公募以外の25団体招致
 - ・生涯学習フェスティバル参加団体を他課のイベント、式典で紹介 2件
 - ・点字ボランティアグループに城西大学の不用コンピュータ15台を寄贈
 - ・FM入間、入間ケーブルTVニュースソース提供

(収入) (単位 円)

科目	決算額	内容
1 補助金	1,425,000	市補助金
2 繰越金	0	
3 寄附金	113,000	フェスティバル協賛金
4 諸収入	23,598	預金利子、謝礼金
合計	1,561,598	

(支出)

科目	決算額	内容
1 総務費	120,065	
1 会議費	80,623	130数回のうち42件分
2 事務費	16,313	事務局扱い外の郵送費、コピー代、感熱紙等
3 備品費	3,129	事務机
4 旅費	0	
5 負担金	20,000	万燈まつり協賛金、観光協会会費
6 諸費	0	
2 事業費	1,441,533	
1 普及奨励費	323,765	CATV番組制作、啓発ステッカー制作
2 調査研究費	17,766	資料、書籍
3 事業活動費	919,674	生涯学習フェスティバル 733,874 家庭教育講座 50,400 研修会開催費 60,056 文化創造プロジェクト 24,519 会報発行(500部) 50,825
4 研修費	180,328	小山、日高、所沢、浦和、国立、長野
3 予備費	0	
合計	1,561,598	



企画編集：生涯学習をすすめる市民の会編集委員
発行：入間市教育委員会生涯学習課

題字：重度身体障害者の生活施設「大樹の里」
書道部 榎本とも子さん

ガガヤク



オオタカの親子

入間市には、保護の必要の高い「オオタカ」が繁殖できるように、すばらしい環境が
観られています。(市内にて吉澤さん撮影)

5000回以上
読者のみなさんへ
おたのしみください

わたしたちのまち入間市で進め
られている生涯学習は、豊かな自
然とすばらしい環境によって培わ
れ、歴史と文化と人情を支えられ
ています。

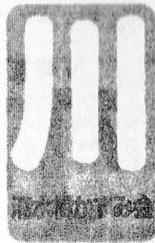
加治丘陵や坂山丘陵をはじめと
する豊かな緑、入間川・霧川・不
老川などの水辺、広大な茶畑など、
美にさまざまで特徴的な自然が息
づき、心なごませる風景をかたち
作っています。

このような入間市の自然を親し
み、楽しみながら守っていくため、
たくさんの方々いろいろな団体
の取り組みが進められています。

そしてこれらの取り組みは、多
くの人々に「やすらぎ」「こうさお
い」をあたえ、子供たちの成長に
おおいに役立っています。

入間の自然や環境をもっと学
び、楽しんで、後世に伝え、いつの
時代でも人と自然の良好な関係を
深めていくことが、一人ひとりの
役割であるといえます。

今回は、入間市の生涯学習のひ
ととして、皆さんの「自然のひ
つきあい方」に注目してみました。



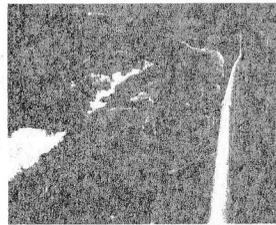
市内の河川浄化を進める市民団体のうち、平成7年11月に読売新聞でも紹介された新久地区の「清水橋かすみ会」は、その活動内容のユニークさで注目されている。

「清水橋かすみ会」は、新久地区の区長経験者を中心に組織された団体で、霞川の美化運動の一環として、河川沿いの遊歩道に花や樹木の植栽と管理を行っている。

昔は、水泳や川遊びができた霞川も周辺の宅地開発と相まって、水質の悪化や水量の減少、水生生物などの減少が進み、また、河岸の斜面は宅地へと姿を変えてきた。

こういった状況の中、「清水橋かすみ会」は、自分たちのできることをまず実行しようとするやる気のある市民によって組織され活動している団体である。

特に植栽している花や樹木は、会員の農家のご主人たちからあります。



霞川堤防での樹木の植栽風景

よる無農薬栽培の野菜を無人販売所で販売した代金で購入するなど、独自の方法を考案し、実行していることは市の内外から注目を集めている。

河川浄化を進めるために、堤防の美化をすずめ、地域のシンボルとして、人々に愛される霞川の復権に着目し、しかも楽しむながら、いきいきと活動している。農業で培った知識と技術を活かし、昔からの霞川の変化を肌で実感している人々たちなら、ではの活動と言えよう。これからの環境対策には、こういったネットワーク的な発想が必要であり、一層充実し、市民の中への広がりを期待したい。(清水)



この日も取材者に、手打ちうどん、キユウリの糠漬、酒まんじろと全部自家製手作りを、ふるまってくれました。

一彦さんの親の代は麹屋。今は漬物屋。漬物に変わったきっかけは、「結婚した時、農閑期に出稼ぎにでなくて、できるから。」さりげないやさしさが返ってくる。「一彦さんの隣でかつさんは「人手が増えたからよ。」



直径3、4mはある大樽。重石の下には、塩漬部分根が8、000本ほど。上澄み部分にはカビが出ていて、上澄み部分の大根が生きているのだと聞いて驚く。土作りから始まり、大根を育て漬物になるまで2年をかける。漬物作り40年のプロには、「有機肥料で育った大根は、塩漬した後の手ざわりで、違いが分かる。」と言う。「経験のみ、何年たっても、年生です。今日する計画はやりとげるまで寝れない。」と頑固に守り続けてきた。

この一徹はまず、大根、ナス、キユウリ、白菜、ラッキョウと野菜を育てる。味噌漬は味噌から作る。納得のいくキムチのタレ作りは3年。冬に入るとべつべつと漬けて。漬物だけで20種類、そして初夏にはお茶作りと一年中休む暇なし。

かつさんも「麹屋に嫁に来たのだから麹の勉強から始まり、次々に挑戦して喜びに変えていく。子育てと同じですよ。漬物も、一味たりない時は、家の中で工夫して、勉強、勉強よ。」

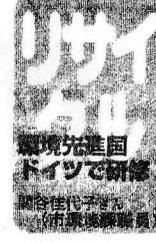
漬物屋で良かったことは、「仕事を通して大勢の人に出会えたことかな。様々な人と意見

交換して、視野は広がるし、お金より、人の為にする事は、自分への教え、それが人の道でしょ。」だから本物にこだわって、値段は据え置きのままなのか。

「夫婦は常に協力して、勉強と努力をしないとね。」互いに同じことを言う。どちらに似たのか、まさに夫婦揃ってのお二人である。(杉山)

※長澤さんご夫婦のように、無(低)農薬、有機栽培、無添加、手作りなど、食材にこだわったり、こういう食材を使ったアイディア料理を考えている人もたくさんいます。特に入間市の特産のお茶を「食べる」工夫も最近注目されています。

今年いるま生涯学習フェスティバルにはこのような活動をしている方々に参加していただく予定です。皆さんもぜひご参加ください。



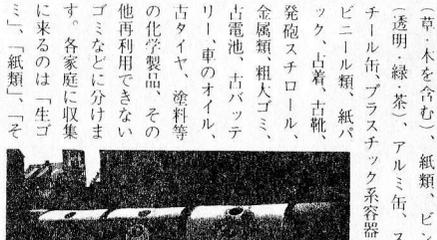
皆さんは、ドイツにある人間市の姉妹都市をご存じでしょうか。私は、ミュンヘンから電車で約40分の所にあるヴォルフラートハウゼン市へ、職員交流研修で2カ月間ゴミ問題について勉強してきました。

ドイツは世界でも環境先進国と言え、ゴミの分別収集は徹底しています。ゴミはリサイクルするというのが考え方の根底にあり、焼却や埋め立ては最後の手段として最小限にとどめているのです。

中心というよりは企業責任と消費者負担によります。商品にはグリーンポイントと呼ばれるマークが付けられ、その材質に応じた処理費用が商品の価格に上乗せされます。ごみ処理は製造した企業または委託を受けた処理会社が集まった処理費用で行うことになっています。これと平行して自治体でのゴミ収集

があります。

ヴォルフラートハウゼン市の場合は、自治体に代わりWGVという会社がすべてのゴミの収集から処理までを行っていました。分別の方法としては生ゴミ(草・木を含む)、紙類、ビン(透明・緑・茶)、アルミ缶、スチール缶、プラスチック系容器、ビニール類、紙パック、古着、古靴、発砲スチロール、金属類、粗大ゴミ、古電池、古バッテリー、車のオイル、古タイヤ、塗料等の化学製品、その他再利用できないゴミなどに分けま



ヴォルフラートハウゼン市のゴミ分別施設

来るのは「生ゴミ」、「紙類」、「その他のゴミ」だけで、それ以外は市内に数カ所ある集積所まで市民が自分で運ばなければなりません。また、「その他のゴミ」は容量に応じて料金を払う仕組みになっています。

WGV社が収集業務を始めた当初は様々な案内パンフレットを作成したり、市民からの問い

うというのです。

人間市に比べると分別はとも細かいし、運ぶ手間もかかりません。それでもこの制度が市民に受け入れられ、定着しているのは、ドイツの人々の人一人一人に自然に大切にする精神が行き届いているからだ、私は感じました。



「緑の少年団」とは、子どもたちを守り、緑を愛し、心豊かな人間になることをめざす人たちの集まりで、現在、埼玉県内に27の「緑の少年団」が組織され、いろいろな活動を行っています。

「森伸の会」は、宮寺二木地区の子どもたちを中心に、今年3月に結団された「緑の少年団」で、現在小学生から高校生まで27人の子どもたちと、保護者24人で構成されています。

その活動は、自主性を尊重して、地域の自然を、親子、楽しみながら守り、子どもたちの健全な育成に活かしていこうとするもので、狭山丘陵を活動の中心として、森の中の体験学習やコミュニケーションを主体に、いくつもの取り組みが考えられています。例えば、樹木の植栽、シイタケの栽培、間伐材を利用した炭焼き、下刈りやゴ

ミ拾いなどのボランティア活動も含まれています。

特に、炭焼きについては、人間川の水質浄化への活用も考え将来的には、近隣都市も巻き込んだ市民主体のネットワークづくりに発展させていこうとしています。

こういった取り組みを身近なところからはじめ、前向きに、着実に充実していこうとする「森伸の会」緑の少年団の活動には、今後、一層の期待が高まるものと思われ、市民や行政からの支援・協力を希望するものです。

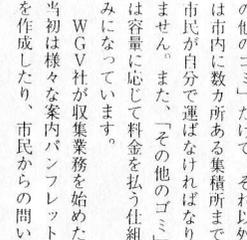
「森伸の会」緑の少年団の活動に興味のある方は、代表者の細見三朗さん(☎3429443)へご連絡ください。(清水)

高めよう 地域の文化 皆の手で

佐々木朋恵さん(野田)

「森伸の会」は、宮寺二木地区の子どもたちを中心に、今年3月に結団された「緑の少年団」で、現在小学生から高校生まで27人の子どもたちと、保護者24人で構成されています。

その活動は、自主性を尊重して、地域の自然を、親子、楽しみながら守り、子どもたちの健全な育成に活かしていこうとするもので、狭山丘陵を活動の中心として、森の中の体験学習やコミュニケーションを主体に、いくつもの取り組みが考えられています。例えば、樹木の植栽、シイタケの栽培、間伐材を利用した炭焼き、下刈りやゴ



狭山丘陵での植樹祭

ミ拾いなどのボランティア活動も含まれています。

特に、炭焼きについては、人間川の水質浄化への活用も考え将来的には、近隣都市も巻き込んだ市民主体のネットワークづくりに発展させていこうとしています。

こういった取り組みを身近なところからはじめ、前向きに、着実に充実していこうとする「森伸の会」緑の少年団の活動には、今後、一層の期待が高まるものと思われ、市民や行政からの支援・協力を希望するものです。

「森伸の会」緑の少年団の活動に興味のある方は、代表者の細見三朗さん(☎3429443)へご連絡ください。(清水)

「森伸の会」は、宮寺二木地区の子どもたちを中心に、今年3月に結団された「緑の少年団」で、現在小学生から高校生まで27人の子どもたちと、保護者24人で構成されています。

その活動は、自主性を尊重して、地域の自然を、親子、楽しみながら守り、子どもたちの健全な育成に活かしていこうとするもので、狭山丘陵を活動の中心として、森の中の体験学習やコミュニケーションを主体に、いくつもの取り組みが考えられています。例えば、樹木の植栽、シイタケの栽培、間伐材を利用した炭焼き、下刈りやゴ



狭山丘陵での植樹祭

— わたしたちも入間の自然とふれあい、楽しく学んでいます あなたもいっしょにやってみませんか？ —

入間遊び場づくり協会

子どもが本当に遊びたくなる、そんな創造的な冒険遊び場をつくり、自然の中でのびのびと思いきり遊び中で、子ども達がお互いに育ちあい、仲間と関わる力や、たくましさ、優しさを身につけてほしいと、オヤジ達が立ち上がりました。

空間、物、協力者募集中です！

連絡先 山下昇 ☎63-4226

よもぎの会

7年前の保健センター主催ヘルシーセミナー受講生が、講座終了後、自主サークルとなりました。春秋のハイキング、廃油利用のせっけん、肥料作り、手作り無添加味噌等のエコクッキング、はぎれを使った手芸等、時には講師を招いて学習しながら、環境も大切に健康づくりをめざしています。

連絡先 樽見真美子 ☎62-4865

加治丘陵山林ボランティア

加治丘陵保全用地として市が取得している山林の下草刈り枝下ろし、間伐等の管理を通じて、里山としての加治丘陵を体験しながら理解を深めています。今年は、間伐材の炭焼きをしながら、山林活用の基礎知識と実技習得を目的にしています。くわしくは市報をごらん下さい。

連絡先 市役所みどりの課 ☎64-1111

こどもエコクラブ

平成7年度より、環境庁の取り組みとして子ども達が仲間と一緒に地域環境、地球環境に関する学習や具体的な活動を展開するため全国各地で設立されています。入間市では、ぶしっ子(仏子)ムッキーズ(小谷田)ゴロッコ、うっきさくらぶ(野田)ちゅういんがむ(南峯)レクリエーション・クラブ(宮寺)の6つのクラブができました。

連絡先 市役所環境課 ☎64-1111



とき 12月7日(日) 9:30~16:00
ところ 入間市産業文化センター
児童センター ほか

第3回 **いるま生涯学習フェスティバル**

産業文化センターホール
10:00~11:30

講演会 **水城武彦氏**
(NHK解説委員)
講演テーマ **くらし・経済・生涯学習**

実演販売

★お楽しみプレゼント★

私にとって生涯学習とは [] です。

[] の中に20字程度の言葉を書き入れてください。住所氏名を記入のうえフェスティバル当日「言葉のメモ」を受付にお持ち下さい。先着50名様に素敵なプレゼントをさしあげます。



お問合わせ・連絡先

〒358 入間市豊岡 1-16-1
入間市役所生涯学習課内
入間市生涯学習をすすめる
市民の会 事務局
☎ 0429(64)1111 内4123
FAX 0429(64)4841

「かがやく」は企画・編集する側からの、方通行ではなく読者の方々のキャッチボールの場です。「皆さんも編集委員として、情報、提言などを、お寄せ下さい。」
(長谷川)

今年度より、本紙のタイトルも皆さんの学習成果の発表の場として活用することにしました。さ。今回は「環境」をメインテーマに編集しました。地球規模で考えなければならぬ大きな問題ですが、身近なことの積み重ねが実を結びます。奇稿、取材などで限りないご協力をいただき、ありがとうございました。

高倉にある「大樹の里」の書道部では、20数名の方が毎週稽古に励んでおられます。今年度より、本紙のタイトルも皆さんの学習成果の発表の場として活用することにしました。さ。今回は「環境」をメインテーマに編集しました。地球規模で考えなければならぬ大きな問題ですが、身近なことの積み重ねが実を結びます。奇稿、取材などで限りないご協力をいただき、ありがとうございました。

この情報紙は再生紙を使用しています。



第6号
平成10年3月

企画編集：生涯学習をすすめる市民の会編集委員
発行：入間市教育委員会生涯学習課

題字：服部 孝さん 100才(春日町)

かがやく



春！だれかど出かけてみませんか？

長谷川政男さん撮影(二本木)

入間市春の行事カレンダー

日	会場	事前のお問い合わせ
3/22(日)	加治丘陵クロスカントリー大会	武蔵野音楽大学周辺 ☎64-1111 体育課
4/5(日)	東金子さくらまつり	東金子公民館 ☎62-7711
11(土)・12(日)	入間市生け花展	博物館 アリット ☎64-2413 中央公民館
12(日)	第1回入間加治丘陵まつり	駿河台大学周辺 ☎64-1111 体育課
14(火)・15(水)	大相撲入間場所(当日券有)	市民体育館 ☎64-1111 商工課
19(日)	自然かんざつ会	彩の森 入間公園 ☎64-1111 みどりの課
25(土)~5/31(日)	発明王トーマス・アルバ・エジソンから宇宙	博物館 アリット ☎34-7711
26(日)	入間市民親善団基大会	産業文化センター ☎64-8377
5/3(日)	入間茶祭り	鍵山栄町通り ☎64-4889 入間市観光協会
9(土)	春の茶会	博物館 アリット ☎34-7711
10(日)	芋島美登里コンサート	市民会館 ☎64-2411
14(金)~17(日)	入間市野鳥展	産文センター ☎64-2413 中央公民館
24(日)	第4回わんぱく相撲入間場所	市民体育館土俵 ☎65-8858 入間青年会議所
24(日)	グリーンウォークいるま	顔振峠 ☎64-1111 体育課
6/14(日)	インディアカ大会	市民体育館 ☎64-1111 体育課
21(日)	日本音楽集団による邦楽コンサート	市民会館 ☎64-2411
21(日)	3対3バスケットボール大会	県立入間青年の家 ☎62-1005
28(日)	入間市民吹奏楽団定期演奏会	市民会館 ☎64-2413 中央公民館

第3回いるま生涯学習フェスティバル

テーマ「くらしの中の生涯学習」

主な内容

● **記念講演会「くらし・経済・生涯学習」**
 講師 NHK解説委員 水城武彦氏 10時～11時30分
 定員400名 申込み

● **特別企画公開ディスカッション14時～15時30分**
「人間の生涯学習の未来を語ろう」
 ディスカッション参加定員20名 申込み

● 展示コーナー

・使ってますか？入間市の生涯学習施設
 ・感じてますか？入間の自然
 ・私たちの広報紙自慢
 学校、職場、団体、個人で出している広報紙を一堂に展示
 コメンテーターを迎えたディスカッション 13時～14時
 展示・ディスカッション参加希望の方 申込み

● **いるま映画愛好会による名作映画上映**
「未完の対局(1982年公開)」
 囲碁ファン必見!! 13時30分～15時40分

● **やってみませんか？**
手作りの楽しさ 実演・展示・即売
 しめなわ・ドライハーブとパンのクリスマスリース(実費)
 リサイクル石鹸(廃油と空の牛乳パックをお持ち下さい)
 洗剤のいらぬアクリル食器洗い・篆刻・リサイクル手芸

● **いっしょに作っていっしょに遊ぼう**
(児童センター・中庭)
 もちつき・おもちゃづくり・超精密紙飛行機・イカ飛行機
 耐空時間くらべ・消防はしご車試乗・ミニSL・かけゴマ・
 組み木・布芝居・おはなし・音楽療法

● **コンピュータともっとなかよく**
 年賀状作り・あなたを診断・インターネット散歩

● **持ち込み自由 カフェ「はなみずき」**
和風茶処「喫茶去(きっさこ)」
 ・お茶を食べよう
 ・お茶を使ったアイデア料理色々
 ・体と地球にいいものを食べよう
 有機農法野菜、無添加味噌、地ビール試飲、入間の湧き
 で飲むお茶、コーヒー、入間でとれたお米

● **消火シミュレーション・救急救命法**
 これは知っておいた方がいい

● **環境にやさしいゴミ分別コンテスト**
 もう慣れましたか、新しい分別袋、お子様とまだ不安な大
 人はぜひ

● **ステージ発表**
 創作曲・創作舞踊・劇・みんなで歌おう

● **生涯学習情報交換コーナー**
 生涯学習活動に関するポスターの展示、パンフレット、チ
 ランをお預りします。
 展示希望の方 申込み

● **記念誌「かがやくSpecial」発行**
 70名の方々の生涯学習体験。必読。当日情報交換コー
 ーにあります。



当日先着50名様に
 素敵なプレゼント
 詳しくは生涯学習情報紙
 「かがやく」(10月15日号)
 をご覧下さい。

抽選で豪華景品
 受付でお渡しするプログラムに抽選番号が入って
 います。最後まで捨てないで!

申込みは **11月28日(金)** まで
 入間市役所生涯学習課内フェスティバル実行委員会事務局
0429-64-1111 内線4123

フェスティバルタイムテーブル

	9:30	9:45	10:00	11:30	14:00	16:00	16:30
産業文化センター	受付	オープニング セレモニー	講演会	ステージ発表	抽選会 エンディング セレモニー		
				見る・つくる 食べる・やってみる			
				映画・ディスカッション			
				いっしょに作っていっしょに遊ぼう			

☆内容等変更の場合はご容赦ください。

☆お車でお越しの方は、市役所駐車場をご利用下さい。

☆第3回いるま生涯学習フェスティバルは「学び輝く彩の国県民運動」に協賛しています。

フェスティバル会場風景

参考資料

公開ディスカッション
 「人間の生涯学習の未来を
 語ろう」
 いろいろを囲んでのめっこく



金子ジュニアリーダーとおやじの会による餅つき



子どもたち
 手作りおもちゃを作る
 ボランティアのおじいちゃん



市民グループのパネル展示

● 実演・販売・展示

参加団体・個人名	内 容
二本木公民館・農業委員	しめなわ作り
環境課	ゴミ分別コンテスト
入間市食生活改善推進員協議会	エコキッズ パネル展示・けんちん汁販売
サニースポット	ガーデニングアドバイス
アースディ'97 入間実行委員会	地ビール試飲・有機栽培野菜販売
喫茶去の会	煎茶・お茶を使ったお菓子販売
授産施設 大樹	だんご・石鹼・無添加味噌販売
岡野平八	TV番組他資料展示・お茶料理販売
石川かおる	アイディア料理コンテスト 入賞作品資料展示・販売
パソナコン塾入間市駅前教室	パソコンで年賀状作り
日本生命所沢支社	ライフプラン診断
N T T 埼玉支店法人営業部	インターネット体験
城西大学・県貯蓄推進委員会	コンタクト とコンピュータによる生活設計相談
入間市消防本部	消火シミュレーション・救急救命法
入間市ボランティアセンター	地区ボランティアの活動紹介
入間六ツ星会	点字実技披露・点字本展示
どろんこの会	活動紹介・会報展示
入間市手話の友の会	活動紹介
三田美江	フラワーアレンジメント実演・展示
生け花研究会	ドライハーブのクリスマスリース作り
パンフルート	パンのクリスマス・天然酵母パンの販売
はなみずき会	コーヒー・お茶を使ったお菓子販売
女子栄養大学献立研究会	お茶を使ったお菓子販売
増岡園	食べるお茶・お茶を使ったお菓子販売
よもぎの会	廃油で作る石鹼・はぎれのお手玉
入間篆刻クラブ	篆刻作品展示・製作実演
藤の台公民館編み物サークル	洗剤のいらぬアクリルたわし
東金子写真サークル	写真の展示・会場の撮影
東町陶芸サークル	活動紹介・作品展示
長澤一彦	有機野菜による漬物

● 児童センター

金子ジュニアリーダー・おやじの会	もちつき
入間市消防本部	はしご車搭乗
入間おやこ劇場	布芝居・エプロンシアター・パネル展示
ミュージックセラピー・ポコの会	音楽療法
おはなしだいすき	読み聞かせ・パネルシアター
山城 功	かけごま
児童センターボランティア	組み木
中島 茂	おもちゃ作り
高橋明義	超精密紙飛行機
三木清始	イカ飛行機滞空時間コンテスト
児童センターボランティア	ミニSL運転
加藤稲造	廃材利用のミニ下駄・竹トンボ・ゴム鉄砲作り
森仲の会	活動内容の紹介・ビデオの上映・もちつき

● ステージ

I RUMA ここからを歌う会	わーたングレヘー 合唱
朗読ボランティア『はづき』	詩の群読
P. E. T. 勉強の会	親業訓練を紹介する劇
木村チマ	創作曲・創作舞踊
桜井千代子	創作舞踊
藤本流三味線	演奏
岡村峯子	新舞踊
童謡連盟	合唱

● 映画上映

いるま映画愛好会	名作映画(未完の対局)上映
----------	---------------

● パネル展示

地区公民館(14館)・市振興公社・児童センター・図書館・博物館・学校教育課
入間青年の家・入間市の自然・消防団活動・里親会

● 私たちの広報紙自慢コーナー

はみんぐ・むさし・PTA広報紙・N T T プリンテック・文化新聞

第3回いるま生涯学習フェスティバル
記念講演 「くらし・経済・生涯学習」

年月日 1997年12月7日
場所 産業文化センター・ホール
講師 NHK解説委員 水城武彦氏

講演の概要

政府は予算を組んで1年間の経済方針を示し、中期的には経済5カ年計画の指針を出すほか、10年、20年後の日本をどう方向づけるかの長期ビジョンを打ち立ててくれる。1991年に発足した経済審議会の中に、2010年委員会が設立され、長期ビジョンが打ち出されたが、私はこの委員会メンバーの一員として参画している。

ここでは21世紀を展望して、日本にとってどんな課題があるのかを論議する。例えば国際社会貢献、平和、地球環境問題、発展途上国のために日本は何が出来るのか等の点が挙げられている。身近な問題としては、高齢者が安心して暮らせる社会、女性が職場でもっと活躍できる社会を構築していくに当たり、大きな柱として生涯学習がある。来たる改革の時代にふさわしい、新しい人づくりが重要な課題となっている。

生涯学習の重要性

学校教育に止まらない生涯学習の重要性が提唱されるのは次のような背景に基づく。

①これからの日本は、働きバチ志向ではなく、労働時間を短縮して各自の自由時間、有意義な余暇利用を増やしていくため生涯学習は重要な意味を持つ。②人生の生きがい、生き方にも生涯学習がもたらすものは大きい。③時代は刻々と変化している。身近な例としては金融機関問題がある。従来は預金しても最後には大蔵省が預金者を守ってくれるため殆ど心配はないと考えられていたが、今日では有力な銀行、証券会社等の経営破綻が常生する時代である。このような激動の時代には新しい知識、技術等さまざまなことを常に勉強していく必要がある。即ち生涯学習こそが、これからの新しい社会において重要な柱となるだろう。新しい時代の社会・経済はどうなっていくのか、どのような視点で学んでいくべきかについて考えてみるべき時なのである。

世界一の金持ち大国・・・しかし、その足元は？

日本は敗戦国となり苦境を乗り越えてきたが、敗戦から今日までを振り返ると次のとおりである。敗戦の荒廃から立ち上がり ⇨ 1968年のGNP国民総生産はアメリカに次ぐ第2位の大国 ⇨ 1980年には世界一の貿易黒字国かつ世界一の債権国。純資産が100兆円に上る世界一の経済大国になった。歴史に残る世界の金持ち大国の足跡を見ると、大正時代、第一次世界大戦までは、100年間にわたりイギリスが「お金の覇権」を握っていた。第一次大戦後、ヨーロッパの疲弊のためイギリスに代わってアメリカが世界一の金持ち大国になった。そして1980年代には、アメリカが一転して世界一の債務国になったため、日本がのし上がり現在に至っている。つまり昔は一世紀にわたりイギリスが、次いでアメリカが半世紀の間、そして現在では日本が世界一の金持ち大国になったのである。

しかしながら、その金持ち大国の生活実感が伴わない。足元を見ると、金融機関の経営破綻、景気の先行き不透明ほか数々の問題がある。NHKの世論調査によると、国民の最大関心事は行政改革でも、福祉でもなく、第一位は、「景気回復」なのである。

21世紀展望の景気対策を・・・

景気は企業だけの問題ではなく、国民負担が増えている昨今では、くらしを直撃している金融システムの問題があり、足元に火がついているのである。これを取り切らなければ21世紀の展望も開かない。

少子超高齢社会

現在65才以上の人が人口の15%（7人にひとり）の社会になっている。従っていまや高齢化ではなくもう既に高齢社会なのである。2020年頃になると25%（4人にひと

り）が高齢者という世界でも例を見ない超高齢社会になる。長寿は幸せなことではあるが、何故これが問題なのか。それは子供が少なくなる少子高齢社会になるからである。出生率は1.432と戦後最低の記録である。少子と高齢がドッキングするとどうなるか。1975年頃は労働人口8人でひとりの老人を支えていたが、2020年頃のピークになると、2人でひとりを支えることになる。くらしの面では少子高齢社会、産業の面では空洞化問題があり、放置しておけば日本の国際競争力は衰えていく。21世紀における日本は産業の衰退国になるのではという不安要因が大きくなる。

新しい時代の改革

産業では新しい分野の開拓、くらしの面では新しい視点で切り開いていくことが必須である。日本は今、かつて見られなかったような歴史的節目にきている。明治維新、敗戦後の日本変革に匹敵する改革を要する。

21世紀の展望

日本経済の活力を引き出し、21世紀を乗り切るために期待される成長分野には次の4計を挙げることができる。

- ① 高度情報通信
- ② 高金融・高ビジネス（福祉、健康ビジネスを含む）
- ③ 環境、エネルギー
- ④ くらしの豊かさ

くらしの豊かさ

余暇利用、スポーツ、諸産業・ビジネス等の意識改革をする時期である。さまざまな制度を改めて新しいものに切り替えていく、そのためには人間の知識を働かせる創意工夫が求められる。創意工夫は、従来の経済社会では中高年の男性がリードするというのが通念であったが、これからは女性が職場でもっと活躍することが求められる時代である。「雪がとけたら水になる」という固定観念に止まることなく「雪がとけたら春が来る。そして何かが始まる」という無限可能性の発想から「くらしの豊かさ」が生まれるのである。

まとめ

さまざまな発想の転換で乗り越える歴史的な節目に置かれている今日、これまでのような「不況の後には好況が来る」というV字型の世の中はもう望めない。成長の高さを目指すのではなく中身の充実すなわち、「くらしの豊かさ」が求められる。従来のように物中心で来た社会から「心の豊かさ」（ボランティア、生涯学習、スポーツのような余暇の有効利用）に比重を置いた「くらし」が追求されてくる。

厚生白書の記述に次のような一節がある。「高齢者というと、概ね暗いイメージを持たれてきた老人神話すなわち先入観があるが、これを打ち破らねばならない」。また「高齢者は健康を害している」「高齢者の頭脳は若者より明敏さに欠ける」という先入観も一概に正しいとは言えない。数ある知能のうち、流動性知能（もの忘れの類）のある程度の劣化は致し方ないとしても、継承知能（学習や経験の影響を受ける知能）は衰退しない。生涯学習は正にこの後者の範疇にある重要な活動である。

「二周目の人生」という言葉がある。さまざまな改革の裏打ち、活力ある前向き姿勢により、高齢者の「二周目の人生」が可能になる。

この度の生涯学習フェスティバルといった催しも、ますます重要な意味をもつ活動になると確信する。

会場参加者とのQ&A

Q：農業でも他の業界と同様、輸入産物が多く外国への依存度が高くなってきた。エルニーニョ現象などの環境異変で、もし産物が入ってこなくなると大変なことになる。工業誘致問題も含め、経済政策の観点からどう考えれば良いか。

A：高度成長の次は工場誘致が大はやりであったが、これで全てよしとは言えない。エネルギーの使い方を含め、公害をまき散らすのではなく、新しい産業や工業の中身が問われてくる。前述の4計につながるようなもの、また高齢社会の発展に寄与する産業とか、新しい分野を切り開くことに通ずる工場誘致ならば、地域の活性化ひいては日本のためになると考えられる。

（作成：長谷川）

第3回いるま生涯学習フェスティバル

特別企画公開ディスカッション
「人間の生涯学習の未来を語ろう」

年月日、日時：1997年12月7日（日）、14時～15時45分

場所：人間市産業文化センター B棟2階

参加者：47名

市長、教育長、生涯学習部長、生涯学習課長他市職員5名

市民38名

ゲスト 田丸淳也氏（県立南教育センター 社会教育主事）

市民から出された意見

- ◆ この数年、人間市は市民の力、人材を上手に引き出している。今後は、いわゆる箱物造りよりもソフト面の充実が求められる。
- ◆ 世代間交流の出来る場をつくる。
- ◆ 情報センターの必要性がある。市民活動、横のネットワークを広げられるようなセンターがあるとよい。（複数参加者の意見）
- ◆ 公民館の各講座レベルはほぼ同じであるから、上・中級講座修了証交付などの工夫をするほか、学校をはじめとする各既存施設の空き教室利用を活性化するのが望ましい。
- ◆ 生涯学習は職場、地域を超越した「志縁—しえん」という関係ではないか。「志」の近い者同志が、ネットワークを強化する場としたい。
- ◆ 生涯学習を動かすのは、市のバックアップを受けた市民である
- ◆ 子供達は、同世代の横の関係に閉じこもる傾向がある。公民館が多いことは良いが、年齢を問わず地域の人達を巻き込み、地域社会の拠点として、長期的展望と市民発信の活動を受け止められる包容力を公民館側に望む。
- ◆ 専門職の配置：生涯学習担当として専門職員を設けてほしい。社会教育（現生涯学習）担当の人事異動があると、それまでの活動が事実上中断あるいはスムーズな継続ができなくなるケースが見受けられる。
- ◆ 公民館活動の改革・改善は急務である。現状は地域に密着せず、どちらかと言えば、管理志向になってはいないか。公民館側の尺度ではなく、時代に即した新しいものを育成する感覚が望まれる。
- ◆ 市／公民館に「～してください」ではなく、「～したい」という時代である。受け身ではなく既存の発信と受信が入れ替わるシステムづくりが必要である。各人がやりたいことを持ち寄り、行政を引っ張っていく時代ではないか。

市長、教育長の所見

- ◆ 公民館には公平・公正を保つべき使命があり、自ずから政治・経済・宗教的制約がある。とはいえ現場でよく話し合い、市民の要望を傾聴していけば実現できることも多々あるだろう。職員の専門性より、職員の意欲によって支えられている面が大きい。
- ◆ 行政に依存することなく活動できる、即ち市民が管理・運営できる、女性センター、生涯学習センター、さらには福祉センター等の整備が夢としてはあるが、そのためには、場所、資金が必要となる。THISの4市が資金を持ち寄り、大学におけるリカレント、聴講生制度等を検討中である。またある種の資格認定を以て、かつての受講者が、教える立場にまわる、入れ替わり活動も考えているところである。

田丸淳也氏（県立南教育センター 社会教育主事）

- ◆ 情報ネットワークシステムを駆使して、広域な情報交換を展開するなど、今後はますます広域的交流を活発にすることが求められる。

今後につながる各所見のまとめ

- ◆ 公民館活動で実現可能なことは幅広く、現に実践されている（例＝中級クラスのテニス教育など）。
- ◆ 市、公民館としての対応にも限界があろう。市民自身の活動を社会にどう還元できるかを考え、活躍の場をつくるなどのキャッチボールをしていく。（例＝24時間オープンで機能している金沢の芸術村は試行の段階ではあるが、まさに市民の責任、質が問われているケースであろう）。
- ◆ 人材情報の一元化が必要である。
- ◆ システムのみならず、熱意のあるコーディネーターが必要であり、その育成はこれからの課題となろう。
- ◆ 参加費を徴収することも、今後の検討要素である。
- ◆ 学習した結果を活かす活動の場、入口と出口をつくること。自分の活躍の場やその機会を創出する。

~~~~~

時間が予定よりオーバーするほど、参加者各位の熱気が伝わるディスカッションになった。貴重な具体的提案も出され、生涯学習の方向性が確認できたといえよう。また広い視点で捉えることのできる市民参加者同志が出会ったことにも、意義を感じる。市長の応答も率直であった。（書記：栗原・長谷川）

第 1 部 : 午後 6 時 30 分～8 時 30 分 産業文化センター A 棟 2 階集会室  
講演 田丸淳哉氏 (県立南教育センター 社会教育主事)  
「どう動いているのか 生涯学習」  
参加者 56 名内 市生涯学習推進会議、連絡会議メンバー他職員 24 名  
社会教育委員、公民館運営審議委員、市民の会等 32 名

第 2 部 : 午後 8 時 45 分～10 時 30 分 レストラン磯花 2 階

講演概要

配布資料: ①「どう動いているのか 生涯学習」 ②地域教育活性化センター概念図

◆「理念」として生まれた生涯学習

生涯学習(lifelong integrated learning)という言葉は、昭和40年(1965年)にユネスコの成人教育で著名なポール・ラングラン(Paul Lengrand)が提唱した、生涯教育(lifelong education)という「考え方」として生まれ注目されるようになった。生涯学習に、これはという確固たる定義はない。「社会教育」は法に則って実施される組織的意図的教育活動であるが、生涯学習は学校中心の水平的統合(integrated)教育ではなく、自発的に行う学習活動であり、社会教育はその一部である。「社会教育」イコール「生涯学習」という誤解は、文部省が、社会教育局をそのまま生涯学習局にしてしまったことに、端を発する。

◆生涯学習の主役は市民であり、行政はその支援をする

「人間生涯学習プラン21」推進計画に述べられているとおり、いつでも、どこでも、だれでも、自由に学習活動を継続するのが生涯学習である。推進上の留意点は3つあり(別添レジメ参照)、これら生涯学習の基盤整備は、行政のaccountabilityである。生涯学習社会構築のためには、①学習機会選択援助システム ②学習機会提供システム ③学習成果の評価システム等の体系化が必要である。

◆なぜ生涯学習なのか?

①学歴社会の是正 ②技術進歩への対応 ③人生80年時代の高齢化、余暇の増大等により、学習すること自体が生きがいになってきている。

◆「何をしてくれるか」から「どのように貢献できるか」へ

市民は行政依存体質から脱却すべきである。税金には限度がある。「行政が何をしてくれるか」ではなくて、市民ができるものは市民がやるべきである。意識改革は難しい面もあるかも知れないし、現在は過渡期、仕掛けの段階にあると思われるが、市民の自覚が不可欠である。市民がまちを愛することを学ぶ「地域学」なるものを、埼玉では実施している。「いるま生涯学習プラン21」は非常によく出来ており、20ページの「生涯学習推進の基本理念」は正にそのとおりだと共感する。この構想に引き続き、5～10年後を見据えた具体的な中期計画が期待される。

参加者の発言

質問 : 学習成果評価システムの必要性はあるだろうか。

田丸氏 : 評価を希望する人が多い現状に鑑み、学習意欲喚起のためにも、評価希望者のみを対象として考えても良いのではないかと。ただし、人物評価は主観の影響を受ける場合があるので、人物評価排除の原則に基づき、時間数評価に止めるのが望ましい。

質問 : (1)生涯学習の構想だけが独り歩きし、生涯学習の必然性、社会科学的裏付けがなされていないと思う。社会科学的裏付けは社会のシステムとリンクしているべきではないか。例えば、リカレントとか労働時間短縮とリンクされていないという観点から、生涯学習の必然性が見出されないまま、行政の一環として、独り歩きしている感がある。

(2)公共性、国、社会的利益よりローカルの利益が優先している。日本人の行動範囲は、過去20～30年まえに比し、現在は世界各国に及んでいるが、人的つながりが伴っているとは言えない。人的にも拡大させる必要があると思う。多くの人が集まる公民館の多様性を活用すべきではないか。運審委員として推進する際、行政の介入が障害になる場合が見受けられる。つまりカリキュラム重視の観点から、評価されているものを優先する傾向が否めない。生涯学習は市民の自主性に任せたいほうが良い。

(3)生涯学習をすすめる市民の会に、公民館の運審委員等、関係者の席を設けても良いのではないかと。

田丸氏 : 社会科学的裏付けが出来ていない件については、「生涯学習学」を構築中である。生涯学習の専管の領域が、なかなか見つからないのが現状である。社会教育、成人教育では数あるが、社会科学的裏付けが出来ていないのは事実であり、学会でも鋭意努力中である。

質問 : 今年度から、社会教育課が生涯学習課になり、いささか困惑しているところがある。14の公民館が生涯学習の窓口になっているが、併せてかなりの数の社会教育団体でも「空き」がない位、活発に利用されている。さらにこの度、ペアー人間というカルチャーセンターが設立された。

義務教育と同様に、全て無料扱いというイメージ、固定観念が根強いようであるが、財源である税金には限度がある。将来は有料化の問題が持ち上がって来ないだろうかとも考える。全てが公的に援助また環境整備すべき事業なのか等の疑問も持っている。このような意味での社会教育、生涯学習の位置づけにつき、自問自答を禁じ得ない。

(作成:長谷川)

平成9年度生涯学習をすすめる市民の会研修報告書

|                 |                                     |     |              |
|-----------------|-------------------------------------|-----|--------------|
| <p>景外視察研修報告</p> |                                     | 作成者 | 松永           |
| 日時              | 平成10年2月22日(日)午後9時15分~20時00分         | 場所  | 小山市立生涯学習センター |
| 出席者             | 石川、栗原、清水、下野、柳山、増岡、三浦、室山、山尾、松永、須田 諸氏 |     |              |

〈研修内容〉

今回、栃木県小山市立生涯学習センター見学及び小山市における生涯学習の取り組みを学ぶため、委員10名と事務局2名で9時15分入間市出発し、途中ドライブインで昼食をとり、1時30分目的地に到着。小山市教育委員会 社会教育課長 吉光寺 勇氏をはじめとする担当4名の方々に温かな出迎えていただきました。

JR小山駅前ビルの6階フロアに設けられた生涯学習センターの専有面積1,455.88㎡の広さとギャラリー・ホール・セミナー室、ロビーなど市民が使い易い施設に感心させられました。何よりも利点は、駅前であること、商業ビルの中にあることだと感じます。これなら働きに他市に通勤している人も利用できるし、買い物に来た主婦層も利用できるであろう。9時30分まで利用できることも魅力であった。

施設見学の後、小山市の生涯学習に対する取り組みの状況を聞く。生涯学習センターが進める生涯学習講座は、教育情報、芸術、健康、経済福祉など幅広い分野で設定され、多様化しつつある市民の生涯学習への取り組みを引き出す工夫がなされました。また、地元の大宮公開講座にもカエ入水参加者に対して市から参加費用の補助金が出ていることも大きな特徴のひとつと言えます。生涯学習推進協議会が中心となり進められている活動の状況がしかり見られました。15万市民が、どのような意識か、市民の要望と市側の有無が多少気かりでもありました。

小山市生涯学習センター研修報告

実施日 平成10年2月22日(日)

作成 栗原

参加者 市民の会委員10名 事務局2名(詳細別紙)

I 小山市の概要

- ◆入間市のおよそ4倍の平らな土地(171km<sup>2</sup>)に同程度の人口(15万人)を擁する。
- ◆生涯学習においては、S61年より準備委員会発足。H7年までに第3次答申。
- ◆施設 図書館2 博物館 文化センター 生涯学習センター 公民館10 小学校27 中学校11 高校5 大学1 専門学校5など
- ◆現在展開している生涯学習事業
  - ①学習情報要請事業
  - ②指導者養成事業
  - ③大学開放事業
  - ④まなびいきいき地域づくり推進事業

II 小山市生涯学習センター

センターの全施設を案内していただき、セミナー室にて説明・質疑応答があった。

(担当職員) 教育委員会 社会教育課長 吉光寺 勇さん  
 同 係長 吉田 恒夫さん  
 生涯学習センター 館長 吉森 茂さん  
 同 主任・社会教育主事 神山 弘さん

I・II詳細については資料参照

(所感)

- ◇生涯学習のとりくみ方、システムの整備など、全体が順を踏んで整えられている。基本的な考えを確かめながら実施されている。
- ◇以下3点は入間市が少しずつでも始められる好事例に思えた。
  - ①情報の収集とデータ利用
  - ②生涯学習センターが行っている中央的、先鞭的な役割(広域的、発展的、専門的な講座の開拓、社会教育法の弾力的運用など)
  - ③大学との提携
- ◇基本をふまえ、いわば優等生的な小山市の印象であったが、自ら欠点として活気不足をあげていた。市民の会の持つエネルギーや飛躍力を盛り込みたいとの発言があり、逆に我々の組織が持つユニークな面も再発見できた。

1 推進体制の整備に関する事業

- ・ 市側の推進組織及び生涯学習関係団体との意見交換の実施
- ・ 委員相互及び行政職員との共通理解を図るための研修会等の実施
- ・ 今後の生涯学習推進体制についての研究

2 生涯学習の普及・奨励に関する事業

- ・ 生涯学習を普及・奨励するためのTV番組の制作・放映

3 学習情報の提供、学習相談体制の整備に関する事業

- ・ 生涯学習情報紙「かがやく」の編集・発行
- ・ 生涯学習ガイドブックについての提言
- ・ 市内生涯学習指導者情報の収集
- ・ これらにともなう関係機関、市民団体等との積極的な意見交換の実施

4 生涯学習の推進に関する事業（関係機関、団体との連携による）

- ・ 生涯学習フェスティバルの開催
- ・ 生涯学習関係機関、団体が行う事業への協力・支援

5 生涯学習に関する調査・研究

- ・ 実践的な活動によって表れてくる問題点を掘り下げた調査・研究を行なう。

第2回 埼玉県子どももの舞台芸術祭

彩幸祭

ひととアートに夢中です

1998年6月～10月 入間市中央公民館、地区公民館、市民体育館等で  
 小会場作品 6 ステージ 中会場作品 1 ステージ ワークショップ 3 ステージ開催  
 主催 入間おやこ劇場・狭山おやこ劇場・飯能日高子ども劇場  
 所沢西こども劇場・所沢東こども劇場  
 埼玉県子ども劇場おやこ劇場協議会

98' 埼玉県文化振興補助事業

スチャカ・ポン

第3回 劇団

公演

1998年5月9日・10日 入間市産業文化センター ホール  
 ——— 朝日のような夕日をつれて ———

劇団スチャカ・ポンは1996年、西埼玉の6つの高校の演劇部OBが  
 結成しました。現在団員の平均年齢19才。第2回入間ドラマフェスタでも  
 好評をいただきました。

グリーンティージャズフェスティバル

——— 入間にゆかりのプロのジャズミュージシャンとともに ———

1998年8月30日（日）入間市産業文化センター ホール  
 主催 J J Mプロジェクト グリーンティージャズフェスティバル実行委員会

生涯学習課主幹 須田 茂

私が市民の会と出会ったのは、生涯学習推進担当になった、平成9年4月1日からである。市役所に25年余り勤務しているが、正直いってあまり聞きなれない会である。また、どのような活動をしているのか、メンバー構成はどのような見当がつかない。多少の不安が脳裏をよぎる。

私自身生涯学習とは何か、あまり深く考えたことがなかったからである。

早速、活動内容、市民の会メンバー等についての概要を担当者から説明を受ける。活動内容も昼夜を問わずびっしり組まれている。

本気で生涯学習に取り組んでいることが伺える。また、メンバーは各々がポリシーを持っており、主張に妥協はしないと聞いている。心してかからねば、相当なプレッシャーであり、以前から白髪もいっそう白くなってきたように感じる。4月半ば定例会に出席し市民の会メンバーと始めて顔合わせをする。想像したとおり、人格も兼ね備えた素晴らしい人達である。何とか一緒にやって行けそうである。その後、討論会、広報紙講座、公民館職員との意見交換会・情報誌編集・TV番組の制作・生涯学習をすすめる所沢市民会議との意見交換会・市民フェスティバル・先進地県外視察等事務局として一緒に行動し1年間はあっという間に過ぎてしまった。

市民の会も事務局も言いたいことは腹にしまわず議論するをモットーにしている。たまには、市民の会のメンバー同士激論を交わすこともあるが、後に持ち越さないようにしているようである。

いずれにしろ、生涯学習が良い方向へ進んでくれればとの願いからではないだろうか。そして、今後市民側の組織「生涯学習をすすめる市民の会」と市側の組織「生涯学習推進会議」が車の両輪となり、生涯学習の推進目標である、『豊かな心ふれあうお茶のまち いるま』の実現に向けて行政の役割、市民の役割を考えながら、いるま生涯学習プラン21を推進していかなければならないと痛感している。

何でも言い合える市民の会メンバーとは長い付き合いになりそうな予感がしている。

生涯学習課主査 諸井 和男

生涯学習推進担当に配属されて今思うことは「あっ」という間に2年が過ぎてしまったことです。職務に対して不慣れな点も原因と思いますが、以前に比べると時間の流れが早まっているなあと感じています。

「生涯学習」という言葉を知らなくても、誰でも趣味や好きなことなどが必ず有ると思います。当然、私にも好きなことはたくさんあります。学ぶ領域は広範囲に渡りますが、その一つひとつ全てが生涯学習だと思います。

その学習活動をする皆さんを色々な面から支援するのが、3年前に発足した生涯学習をすすめる市民の会であり、また、その後に策定した生涯学習推進計画を実現することも大事なことを考えています。より一層生涯学習活動を支援するために市民の会と行政が連携・協力を図り一体となって『生涯学習都市』を目指すべく、事務局として両者をコーディネートしスピードは遅くとも着実に推進してゆかなければならないと考えています。

また、個人的にも市民の会の委員さんと接しさせていただき、自分を高めたり、交流や勉強の場などをたくさんいただき感謝しております。

入間市博物館主事 大石 浩士

昨年は様々な事業の企画・運営に携わることができ、多くを学ぶ機会を与えられました。しかし、自己を見つめ直すことを怠るという過ちを犯したために、この貴重な経験を有効に生かしていく可能性を減らしてしまったのではないかと自問が続いています。

そこで、4月の人事異動を機に日記（毎日記しているわけではないので“日記”と呼んで良いかどうかは別ですが）を付け始めました。それによって昨年の過ちを少しでも修正できると考えたからです。

職場は変わりましたが、ここでの仕事も目指しているものは以前と変わっていないと考えています。今後も市民の会委員の方々と、共に同じ目的を持って活動できる機会があることを楽しみにしております。

1998年 春

編集・発行 入間市生涯学習をすすめる市民の会  
事務局 入間市豊岡 1-16-1  
入間市教育委員会生涯学習課内



ひとりじゃさびしい...